

4th
Since 2010

NGO FEST TOKYO

渡航報告書 2014



FEST 

【代表挨拶】

お忙しい中、私たち学生国際協力NGO FEST TOKYOの渡航報告書をお手に取っていただきありがとうございます。本報告書は2014年の春と夏に行った渡航を中心に、私たちNGO FEST TOKYOの1年の活動を紹介しています。

この報告書には2つのねらいがあります。1つめは、我々の活動を皆様にお伝えし、ご意見やアドバイスをいただくこと。そして2つめは、私たちと同じように学生による国際協力活動に挑戦している方々、またこれから挑戦しようという方々の「参考資料」となることです。

私たちは学生組織による現地コミュニティへの直接支援という挑戦のなかで、成果と共に数多くの失敗を経験してきました。現地の状況のめまぐるしい変化、突如発生するプロジェクトの課題など、渡航に行く度、常に予想を超えた事態に対処しながら活動してきました。

本報告書ではそれらを「発生した課題」「課題へのアプローチ」「結果」という3つの項目にまとめています。

本報告書をご覧いただく際にはぜひ、「自分ならばどうするか」と考えてみてください。FESTが挑み続けた怒涛の1年間を、きっと感じていただけるはずです。

学生国際協力NGO FEST TOKYO 第4期代表 大野航太郎

～目次～

団体説明.....	2
支援活動.....	5
ピナハボン.....	5
パライ.....	26
国内活動.....	44
フォトワーク事業部の活動.....	57
引退メンバーコラム.....	63

団体説明

正式名称

学生国際協力 NGO FEST TOKYO

創設日

2010 年 7 月 28 日

構成員

大学生 34 名

高校生 2 名

団体理念（2014 年 7 月 一部改訂）

Vision 世界から向こう見ずな支援をなくす

Mission 最良の国際協力を探究、実行、啓発する

FEST の理念には、現在の世界情勢や行われている支援に目を向け、考察・分析していく精神と、より良い国際協力の在り方を考えていく能動的な姿勢が込められています。

私たちは自分たちの行う国際協力を、「私たちと支援地がお互いのために行う活動」だと考えています。違う国で生まれ育ち、異なる価値観を持つ私たちと支援地の人々が、それぞれの理想と目的のもと、明確な理由や動機をもって支援という形で協力するからこそ、理解と尊重が生まれ、お互いに協力する意義がある対等な関係を築くことができます。

私たちは現在、「短期完結、日本人完全撤退」を目標に、問題設定からプロジェクトの実行までを現地住民が主体として決定する支援で支援地の継続的な発展を目指しています。常にその状況における「最良」を考えながら、現地での実行を通じた国際協力への「探究」を行っています。

組織体制

事業部制

海外事業部.....支援地への直接的な支援を行います。

国内事業部.....国内での啓発活動を行います。

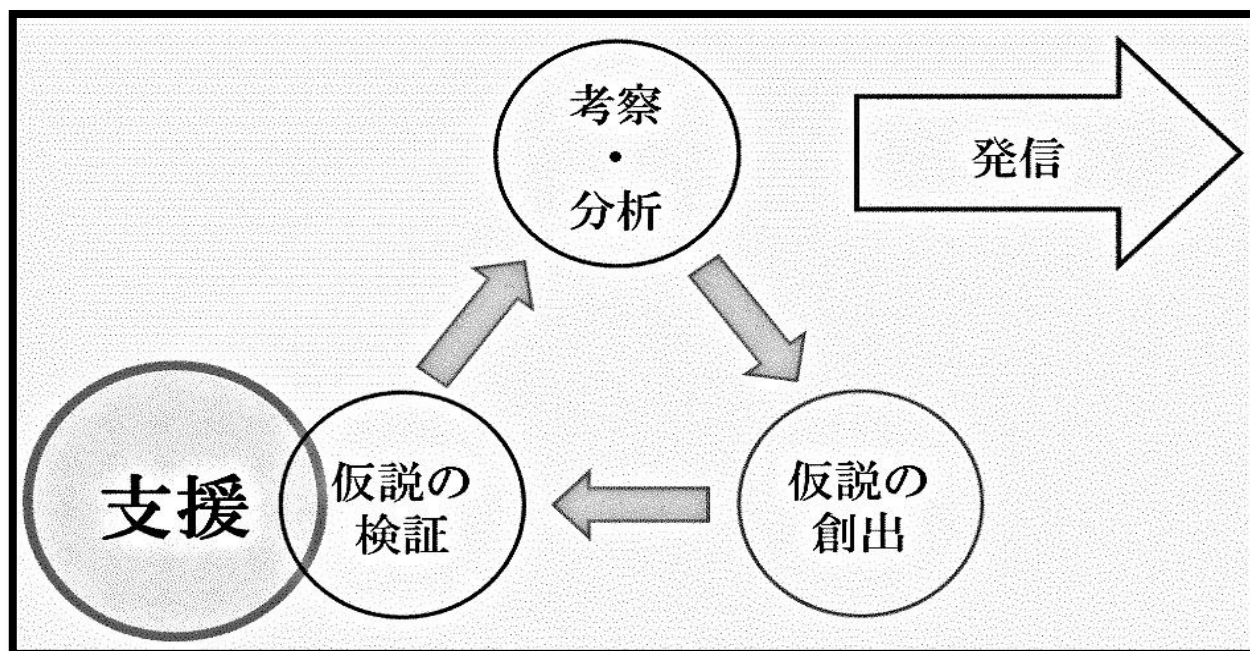
フォトワーク事業部.....現地との交流、写真を通じた国内での啓発活動を行います。

関係団体

学生国際協力 NGO FEST HIROSHIMA（2012 年設立）

学生国際協力 NGO FEST OHITA（2013 年設立）

NGO FEST TOKY の事業モデル



FEST はより良い国際協力を探究していく学生 NGO です。私たちの行う活動はいずれもこの「探究」の精神に基づいています。

自発的な学習、支援の実行を通して得た知識、経験からより良い支援の在り方を描いた「仮説」を創り出します。それを支援の根底におき、実際の支援を通して検証していきます。そのため、**FEST** は支援をただ与えるだけではなく、現地からも情報の提供を受けるという、両者が一方のみでは獲得しえない(協力する必要がある)明確なメリットを持つ「対等」な協力関係のもとで活動しています。

現在掲げている仮説は、スラム住民など、「被支援者」となりうる層の問題解決能力について扱っています。現地の問題解決、生活向上を行うアクターとして現地住民が高い能力を持っていることを証明していきます。

多様な問題を抱える彼らの生活と低い社会的地位は、彼らの能力と努力によってもたらされたものではありません。彼らを抑圧、阻害する様々な要素を **FEST** が排除することによって、問題設定からプロジェクトの立案、実行までを現地住民が主体となって行ったプロジェクトが成果を残せること。それらを現地への支援を通して検証していきます。

コミュニティ支援の主体として彼らの能力が現在よりさらに認められていくことは今後の国際協力において重要であると考えています。また、同時に彼らのサポートを支援者として未熟な「学生」が行っていること。そして、我々が支援で出た成果を自分たちのものとして公表することを必要としない「学生組織」であることを踏まえ、この仮説の検証は学生国際協力の新たな可能性を創り出していくためにも大変意義があると考えています

戸澤調(とざわしらべ)

NGO FEST HIROSHIMA 第2期代表



今までの FEST の活動で一番印象に残っていることは何ですか？

渡航はもちろんなんですけど日本での活動のことで、自分が代表になってから人数が急に増えて... 大体 20 人くらいかな。その人数で活動するときに FEST 広島も変わったのかなと思った。単純に人数が増えたことが成長ではないんですけど、これだけ多くの人が集まってくれて、そしてそれに伴って代表としての責任も強く感じたのが一番心に残っています。

あなたにとって渡航とは何ですか？

渡航とは成長の場であるとともに、何かを現地のために還元する場であると思います。というのも、もちろん自分たちの成長の機会もあるけど、私たちの行う国際協力というのは決して踏み台やステップではなくて、現地の人との関わりであり、かつ自分たちが行くってことは何か還元出来るものがあるって然るべきだと思う。このことは常に普段の活動から言っていて、特に新人には絶対言っています。

FEST- HIROSHIMA の FEST- TOKYO とはここが違うところってところは？

まず、広島という場所が東京に比べて人も少なく国際協力への関心も高くないと思うので、メンバーが集まらなかったり、知識面でも東京に比べてまだまだ浅いところがあると思う。人材的にも地理的にも不利な点があるなかで、そこをどうやって埋めていくか、どうやったら HIROSHIMA のあり方を出していけるかを考えていくのが FEST-HIROSHIMA かなと思います。

これからの FEST 広島の展望をお願いします。

団体としてというよりは支援のあり方という意味になるのですが、だんだん方向性が固まってきていると感じています。FEST はもともと現地のニーズに基づいて、現地と協力して、自立を目指した支援を行って、いくつという悪く言えば漠然としていて、良く言えば本当に何でもできる様な理念を掲げて活動しています。今は現地のニーズやこういった事をやれるというのがだんだん分かってくるうちに、活動がどんどん具体的になってきたところ。「教育と雇用」にフォーカスした支援の方向性になって、また国内の啓発の方向性も徐々に固まってきている時期にあるので、これからの第3期はさらにそれを固めていき、FEST 広島の味をどんどん出していった欲しいなと思います。

支援活動

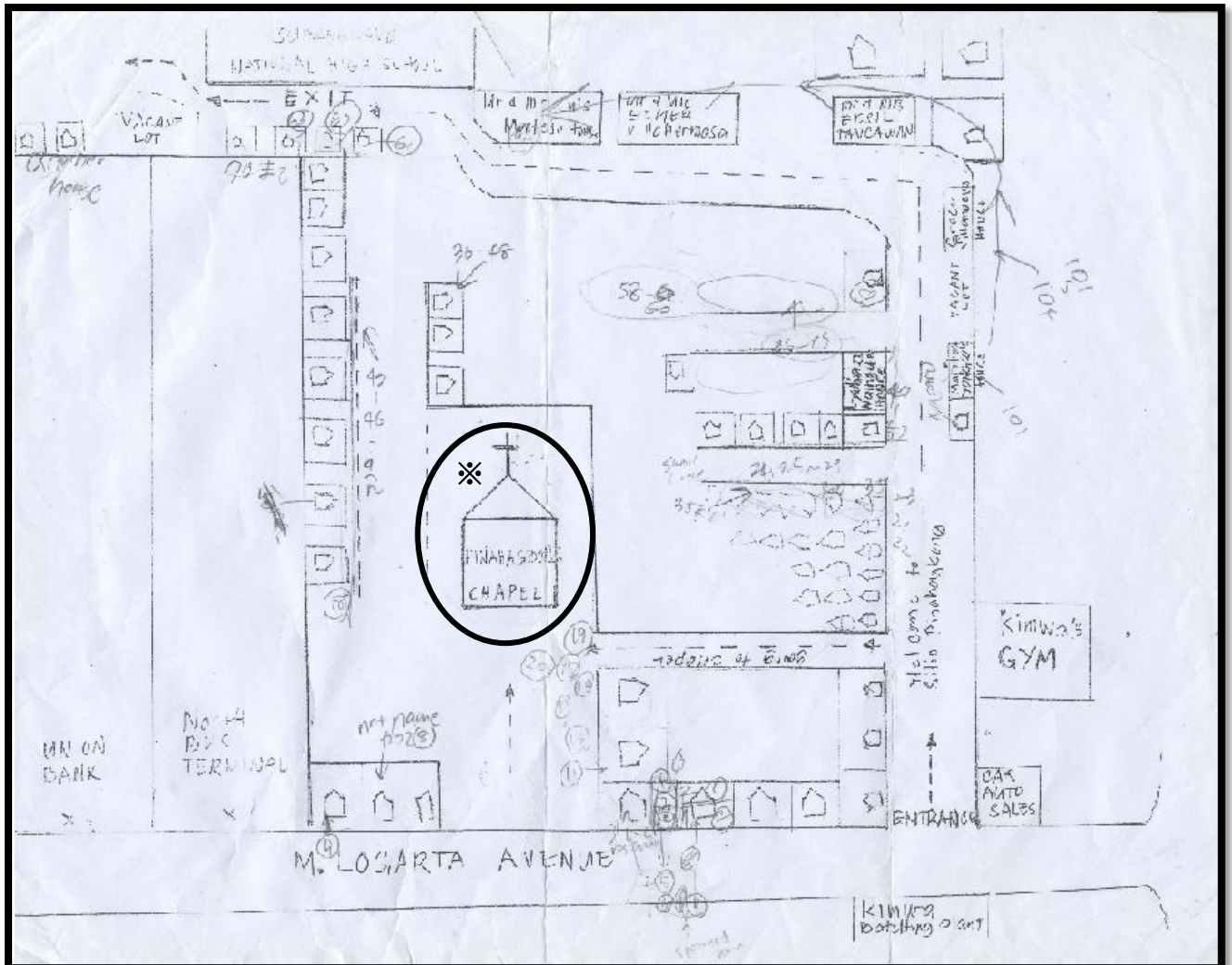
対象地域:ピナハボン

February.28~march.31/August.12~September.9



フィリピン共和国 マンダウエ市 スバンダク地区 ピナハボン (Pinahagbong)

大型のショッピングモールへ続く大通りに面した場所にあり、現在の世帯数は 78 世帯。2013 年に支援を開始し、今回(2014 年夏)で 3 回目の渡航となりました。



※ピナハボンの中心にはチャペル（支援地内の教会）があり、後述する「集会」はここで行われます。

ピナハボンのコミュニティーエリアは近親者同士の結びつきによって形成され、「フロントサイド」と「バックサイド」の2つに分かれています。両コミュニティーには交流があり、関係が断絶していると言うわけではありません。

ピナハボンの住民は、十分な収入を得られないため公有地および私有地にスクウォッター（不法居住者）として暮らしており、デモリッション（強制立ち退き）の可能性もわずかながら存在しています。また、コミュニティー内でも学校に通える子供と通えない子供がいるなど、ピナハボン内でも収入の格差が存在します。

現地組織 FEST—PINAHAGBONG

FEST—PINAHAGBONG は、2013 年夏渡航時に組織した現地住民による問題解決のための組織です。支援地の住民の中から 5 人の役職者(オフィサー)を選出、プロジェクトの運営を行っています。

- 代表…オフィサーミーティング、全体集会を仕切る存在。プロジェクト実施においては最終的な決定権を持つ。
- 副代表…代表のサポートを行う。
- 経理…プロジェクトを実施するための資金運用、管理を行う。
- 秘書…オフィサーミーティング、全体集会で話し合ったことや決定事項の記録を行う、
- 監査…オフィサーがそれぞれの役職の仕事を行っているのか確認する。

代表 Conie Caba



4 人家族の母。2 人の子供は海外に出稼ぎに行っており、夫婦でサリサリストアを経営している。

経理 Jona Malavilla



いつも FEST に協力的で、交流イベントにも積極的に参加してくれる。バランガイ（地域行政）との親交が厚い

監査 Lydia Naingue



ピナハボン内でレストランを経営している。チャペルを管理する組織のリーダーで、礼拝や寄付の呼び掛けを率先して行っている。

オフィサー（改選後：2014 年 10 月現在）

副代表 Edwin Montayre Jr



改選前は代表職に就いていた。セブ島バランバン町にあるサンホセ・レコレスト大学に通っている。

秘書 Lilibeth Aranco



普段は Elementary School（小学校）の教員をしている。芯のあるしっかりした性格で、周囲から信頼される人物。

※

文中では「オフィサー」、「現地住民（住民）」という単語が出てきますが、オフィサーは FEST-PINAHAGBONG の役職者、現地住民は支援地内で生活しているオフィサー以外の住民を指しています。

FEST—PINAGAGBONG 設立まで

現地組織 設立経緯

2013年夏渡航時に行った第1回集会で、**現地における問題**の設定と**解決のためのプロジェクト**を立案しました。その際にプロジェクト実施の中核を担う役割が必要とされたこと、そして、FEST 撤退後にも現地住民組織主体でピナハボンの問題に対処していける環境を作るため、現地組織の設立を住民と共に行いました。

① オフィサーの仕事の説明

FEST-PINAHAGBONG 設立にあたり、まず FEST 側から「オフィサーに求める条件」と、「オフィサーの仕事内容」を提示、住民側の受諾を得ました。

FEST がオフィサーに求める条件

- ・オフィサーの仕事ができること
- ・Facebook アカウントを持っていること
- ・英語を話せること
- ・ピナハボンの状況を改善したいという意思があること
- ・FEST のプロジェクトを信頼していること
- ・すべてのオフィサーがそれぞれ親族関係にない事

オフィサーの仕事内容

- ・FEST との情報交換
- ・資金問題を解決するための継続的なシステム（ファンドなど）の構築
- ・プロジェクトに関する情報を住民全体に共有するための集会を開く
- ・Facebook のグループページを管理する

② 選挙の実施 ～役職、候補者選出方法、投票形式の決定～

次に選挙を行う集会を実施。集会中に住民と話し合いながら、用意する役職、候補者の選出方法、投票形式の決定を行いました。

役職

オフィサーの役職は**代表、副代表、秘書、経理、監査**の5つに決定しました。

選挙方法

FEST は立候補制を予定していましたが、実際に立候補を募る段階になったところで立候補制を拒否する意見が数多く挙げられ、**住民間の推薦で候補者**を選ぶことに変更しました。



投票について

開票時に混乱がないように各役職ずつ分けて投票を行い、開票は **FEST** が行いました。

③ 実施

司会者を中心に推薦者選びは進み、各役職につき二人の候補者が上がりました。その後、候補者たちによる**立候補演説**を行い、投票に移りました。

住民の方々が各投票している間に、投票が終わった役職については順次 **FEST** が開票作業も進めていきました。結果、投票により各役職の当選者が決まりました。しかし、代表と秘書が同じ家庭から選ばれており、選挙の条件上不成立となりました。対応として、「秘書補佐」という役職を創出、秘書として選ばれた方が就任し、秘書に落選したもう一人の候補者が秘書の役職につきました。

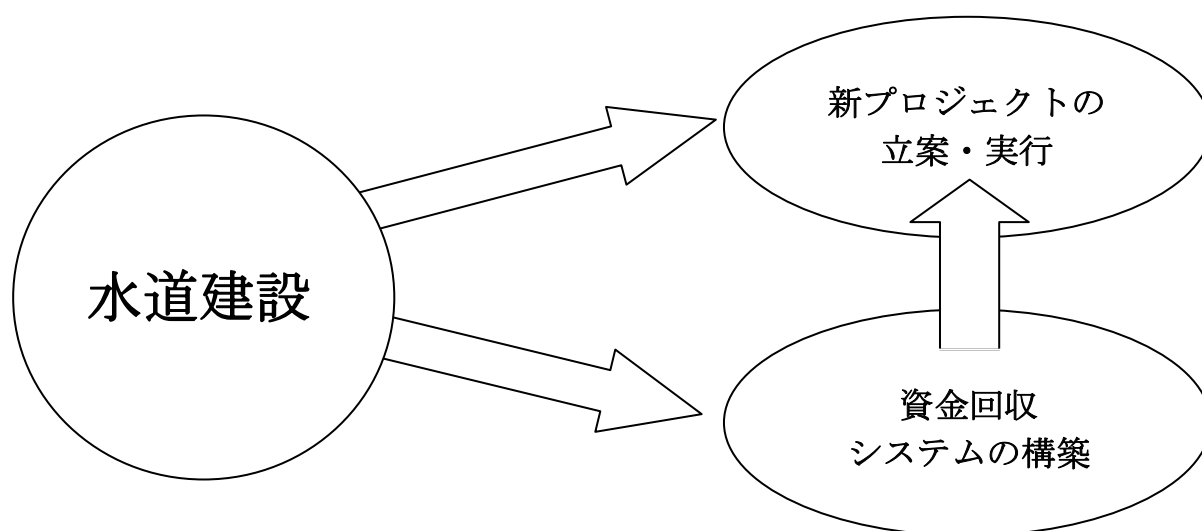
各役職が決まった後はそれぞれのオフィサーたちの抱負を発表する演説を行い、集会を終了しました。



「オフィサーの決定」をもって **FEST-PINAHAGBONG** の設立を完了し、水道プロジェクトなど、現地組織としての活動を開始しました。

支援内容

前述の通り、2013 年夏渡航、ピナハボンを支援地に決定した私たちがまず初めに行ったのは、住民が、「自分たちにとって何が問題か、それは何が原因か、それに対してどのような解決策があるか」、それらを話し合うための集会でした。挙げられた複数の問題からそれにアプローチをするかを住民による投票で決め、水道インフラの整備に取り組むことに決定。また FEST からの提案により、水道建設によって負担が軽減された水道代を集めて、今後のプロジェクト実施に利用していくことを長期的な目標として設定しました。



また FEST としては、以下の 2 点を支援のゴールとして設定しています。

①プロジェクト立案

FEST 無しでオフィサーを中心として現地が必要な時に適切なプロジェクトが立案され実施しプロジェクトサイクルを回せる状態。

②ファンドシステム

定期的にプロジェクトに必要な資金が集められ、その必要に応じて資金を利用できる状態。

《実施項目》

1. 水道・ファンドプロジェクト(2013 年夏～)
2. オフィサー改選(2014 年夏)
3. ニーズ調査、教育プロジェクトへの移行(2014 年夏) 中止
4. 現地との交流（ワールドカフェ、Picture board、うどん）（2014 年春～）

1.水道・ファンドプロジェクト

彼らにとっての問題は、なぜ「水道」だったのか？

ピナハボン内には水道を所有している家庭が 78 家庭中 5 家庭しかなく、他の住民が水を買う際には、自分で水道を所有したときよりも高い値段でそれらの家庭から購入しなければなりません。

生活に必要な水を買うために度にお金がかかり、経済を圧迫していました。また重い水を運ばなければならないこと、さらに 5 家庭の水道も老朽化してきていることから、住民は水道を建設することが現状最優先すべき課題だと考えました。

■FEST-PINAHAGBONG から提出された水道プロジェクトの概要

November 16, 2013. To: FEST Japan. From: FEST Pinahagbong, Cebu Philippines. Subject: Proposal for Water Supply Project Introduction. "Water is the basic need of man thus essential for the human body to function" according to some psychologists. On the other hand, the lowest price of water is enjoyed by households connected to MCWD and private water works. In some areas especially living in squatter area mostly are low income households, is paying a very high cost of water. Like the residents in Pinahagbong whose the main problem of the family that part of the big budget goes to relying on vended water pay which more or less could spend P1000 per month. Moreover, this enormous problem as considered by every household in Pinahagbong had been there for 20 years and counting but still no address for solution yet due to individual incapacity to formulate a solution especially if it involves financial matter. Thus, the residents in Pinahagbong were so thankful and blissful to the FEST Japan for being an answered prayer to the problem on the costly expenses of relying on vended water for use. Since the FEST Japan comes in unexpectedly and wanted to help and make a difference to all the residents in Pinahagbong therefore a major problem has been identified which is a highly cost of budget from every household intended for water. Then, the solution to answer the major problem was started to work out with the accompaniment of the ever patience, understanding and supportive FEST Japan before leaving the place through tying up with the MCWD which is the solely source of water supplied in Mandaue and Cebu. Problem The big part of the budget of the every family living in Pinahagbong has been allocated to buying on vended water which could be used for food and education for the children. Every household consumes P1000 monthly for water only which could have been reduced by 75% if connected with the MCWD. Unfortunately, the expenses for installation for stub out or main pipe are very costly which is about a 500 meters away from our barangay, Pinahagbong.	Solution. To have a connection in the MCWD to achieve the 75% reduce expenses of every household in Pinahagbong intended for the water alone. Also, create a funding system to defray the possible expenses for water supply installation specifically for stub out or main pipe. Budget Proposal/Funding System (Water Supply Project). Here below is the budget proposal for the water supply project based from the detailed information gathered from Metro Cebu Water District (MCWD). Expenses: <table><tr><td>41,000php</td><td>Main Pipe P 121,000 (- 80,000php, from FEST support).</td></tr><tr><td>3,000php</td><td>Private Pipe (expense per meter depend on distance).</td></tr><tr><td>4,950php</td><td>Meter (each household).</td></tr></table> Initial Expenses for Every Family. Main pipe: <table><tr><td>41,000php</td><td>Main Pipe.</td></tr><tr><td>÷ 32</td><td>Number of Household</td></tr><tr><td>1,281.50php</td><td>Payment for each household to be fully collected by February 2014.</td></tr></table> Meter: <table><tr><td>4,950php</td><td>Cost of the meter for every household.</td></tr><tr><td>- 1,500php</td><td>Advance payment that must to be paid.</td></tr><tr><td>3,450php</td><td>Remaining amount for the meter cost will be payable good for 12 months.</td></tr><tr><td>÷ 12</td><td>(months).</td></tr><tr><td>287.50php</td><td>Will be added to the monthly billing of each household (12 months).</td></tr><tr><td>3,000php</td><td>Private Pipe (estimated cost more or less depends on the distance from the main pipe down to each household).</td></tr></table>	41,000php	Main Pipe P 121,000 (- 80,000php, from FEST support).	3,000php	Private Pipe (expense per meter depend on distance).	4,950php	Meter (each household).	41,000php	Main Pipe.	÷ 32	Number of Household	1,281.50php	Payment for each household to be fully collected by February 2014.	4,950php	Cost of the meter for every household.	- 1,500php	Advance payment that must to be paid.	3,450php	Remaining amount for the meter cost will be payable good for 12 months.	÷ 12	(months).	287.50php	Will be added to the monthly billing of each household (12 months).	3,000php	Private Pipe (estimated cost more or less depends on the distance from the main pipe down to each household).
41,000php	Main Pipe P 121,000 (- 80,000php, from FEST support).																								
3,000php	Private Pipe (expense per meter depend on distance).																								
4,950php	Meter (each household).																								
41,000php	Main Pipe.																								
÷ 32	Number of Household																								
1,281.50php	Payment for each household to be fully collected by February 2014.																								
4,950php	Cost of the meter for every household.																								
- 1,500php	Advance payment that must to be paid.																								
3,450php	Remaining amount for the meter cost will be payable good for 12 months.																								
÷ 12	(months).																								
287.50php	Will be added to the monthly billing of each household (12 months).																								
3,000php	Private Pipe (estimated cost more or less depends on the distance from the main pipe down to each household).																								
3,000.00php Payment for the private pipe that will vary depends on the distance 5,781.00php Total amount to be collected by the FEST Pinahagbong. Qualifications of families who can avail the water supply project. The FEST Pinahagbong Officers have already identified the 32 families who can avail the water supply project in the barangay. In fact, we have with us the list and coming up who can enjoy the water supply project a qualification was made. 1. Must be a home owner. 2. One member of the family can only avail even if already married. 3. Length of stay is also take into consideration. 4. Have a commitment and a heart to support the funding system for the next project. In contrast to the qualified family for the water supply project, the FEST Pinahagbong has initial plans for those families who can avail like the following: 1. Put sub meter for not qualified family. 2. Moreover, The FEST Officers in Pinahagbong made a contract of agreement to every qualified family to really ensure that they will support all the FEST endeavours most especially for the common good of all residents in Pinahagbong. Funding System. The FEST Officers in Pinahagbong have decided to collect 125php weekly to each family to gather money for their expenses in the water supply project. Then will say to it that on January next year the needed money will all be at the hand of the FEST Pinahagbong Treasurer. Also, all the collected money will be put at the bank for safety purposes. In addition, if ever the family who are qualified and accepts all the agreement for an instance can't continue the payment due to financial problem will not be rejected right away. The 31 families who benefited the water supply project are obliged to help to be included in the agreement.	Current Situation. Our barangay had experience different calamities like earthquake and typhoon which brought everyone's life in danger. Some of us suffered psychological problem like trauma, nervous and loss of appetite. But despite of the residents in pinahagbong were still very thankful because life has been spared. Meanwhile, the calamities could be considered as a blessing to all residents in pinahagbong on a brighter side, why? Because the love, friendship, hospitality, kindness, compassion, understanding and unity were all shown during those volatile times in the lives of all residents. As we affirm, we are all okay and our lives now are back to normal. Also, we would to express our heartfelt gratitude to FEST Japan who really showed their concern and love to us. Thank you so much because all your thoughts and prayers really help us to surpass everything. Prepared by: Edwin C. Montoya Jr., FEST Pinahagbong - President. cc: FEST Officers in Pinahagbong																								

水道建設のための資金集め

水道建設に必要なとなった金額

建設に必要な金額 180382.97 ペソ

FEST からの出資額 93000.00 ペソ

現地からの出資額 87382.97 ペソ

FEST の資金獲得方法

資金回収のためクラウドファンディングへの応募、各種助成金への申請を行いました。結果として SONY マーケティングボランティアファンド様から助成金を頂き、FEST が担当した額の資金集めは達成することができました。

ピナハボンでの資金獲得方法

ピナハボンでは、FEST-PINAHAGBONG のオフィサーたちがプロジェクト参加者を募集し、参加家庭ごとに出資しました。

■現地の水道会社から
提出された見積り【1回目】

 Metropolitan Cebu Water District Magallanes - Lapu-lapu Streets, Cebu City Tel. Nos. (032)254-8434 to 39, 256-0413 to 15, 256-0424 Fax Nos. (032)254-5391, (032)412-2774 E-mail: mcwd.gov.ph MCWD is ISO 9001:2008 Certified				
I. MATERIALS	QUANTITY	UNIT PRICE	AMOUNT	
DI Tapping Saddle 150mm X 50mm	1 pc.	P 6,850.71	P 6,850.71	
Corporation Stop, 2" dia. (ISO)	1 pc.	3,790.45	3,790.45	
PE Tubing 2"Ø	480 meters	189.60	91,008.00	
Brass Coupling, 2" dia. (ISO-SF)	33 pcs.	2,517.40	83,074.20	
GI, Coupling 2"Ø	13 pcs.	79.75	1,036.75	
GI Elbow, 2" x 90° dia.	4 pcs.	111.75	447.00	
GI Flange Nipple, 2" x 0.15m	3 pcs.	347.15	1,041.45	
GI Flange Nipple, 2" x 0.70m	3 pcs.	609.95	1,829.85	
Butterfly Valve, 2"	3 pcs.	1,816.85	5,450.55	
Tee, GI, 2"	2 pcs.	144.30	288.60	
Tee, GI, 2" Cross	3 pcs.	296.15	888.45	
Bolts & Nut, 5/8 x 5", GAL, FT	12 pcs.	25.75	309.00	
Neoprene Gasket	0.5 kg	204.10	102.05	
Tape, Teflon, 0.075mm x 25mm x 10m	25 pcs.	19.00	475.00	
GI, Plug 2"	3 pcs.	42.57	127.71	
Sandbedding	23.25 m³	1,625.60	37,795.20	
				P #####
				234,514.97
II. LABOR				
1 - Water/Sewerage Maint. Head	15 days	P 1,221.72	P 18,325.80	
1 - Sr. Water/Sewerage Maint. Man B	15 days	784.31	11,764.65	
1 - Sr. Eqpt. Tech.	15 days	784.31	11,764.65	
3 - Water/Sewerage Maint. Man B	15 days	587.31	26,428.95	
1 - Driver	15 days	631.36	9,470.40	
				P 77,754.45
III. EQUIPMENT				
Compressor w/ Jackhammer	15 days	1,500.00	1,200.00	
Concrete Cutter	5 days	1,000.00	5,000.00	
Service Vehicle	15 days	P 1,500.00	P 22,500.00	
Fuel - gas (12 liters/day)	15 days	51.00	9,180.00	
				P 37,880.00
IV. ROAD RESTORATION				
Asphalt Pavement	2.00 m²	P 1,450.00	P 2,900.00	
Concrete Pavement	120.00 m²	1,200.00	144,000.00	
				P #####
				146,900.00

発生した課題

問題と解決のためのプロジェクトを設定した 2013 年夏渡航。予定では現地と FEST がそれぞれ資金を獲得し、2014 年春渡航で水道会社に資金を支払うことになりました。しかし、2014 年春、現地を訪れてみると、そこには以下のような課題が...

- ①水道建設会社からの請求額が何故か増えている
- ②住民からは「オフィサーが何も情報共有してくれない」という不満が出ている
- ③参加家庭数が不足しているため、建設資金が足りない

課題へのアプローチ

①水道建設会社を訪問し、値上がりの原因を調査

水道建設の請求額について正確な情報を入手するために、オフィサーと共に水道建設会社を訪問し担当者に話を伺いました。予定されていた割引が行われていない。プロジェクト参加者数が 2 倍近く多く見積もられている、工事に必要な資材が値上がりしたという原因が挙がり、その後交渉の結果、適正な金額にすることができました

②情報共有のための集会の実施

水道会社訪問によって得られた最新の情報をオフィサーと共有、集会で住民に説明することで、現時点で把握している情報の共有を行いました。その際にオフィサーと住民同士が話し合い、情報共有のために毎週集会を開くことになりました。この集会ではプロジェクト参加者が支払う金額や水道建設までのプロセスを確認していきます。

③比較的裕福な家庭が一時的に負担

水道建設会社に建設を依頼したところ、ピナハボンに水道を配備するには最低でも 64 家庭の参加が必要でした。しかし、必要数 64 家庭のうち、プロジェクトへの参加は 46 家庭に留まりました。早期の支払いにより建設費の割引が適用されるため、対応策を住民間で協議、割引の有効期限までに参加家庭を集めるのは難しいと判断し、19 家庭分の不足額を経済的に余裕のある家庭が立て替えることを決定しました。その結果 2014 年春水道の発注が完了しました。発注後も新たにプロジェクトへの参加、出資を受け付け、そこから資金を立て替えた家庭に返済していくことになりました。

■水道プロジェクトの参加者名簿（2014 年春）

NAME OF THE PROJECT : WATER SUPPLY									
SPONSOR OF THE PROJECT : FEST TOKYO									
BENEFICIARIES OF THE PROJECT: SITIO PINAHAGBONG, CEBU PHILIPPINES									
LIST OF FAMILIES WHO PAID			Amount Paid			TOTAL COLLECTED MONEY	FOR ADDITIONAL PAYMENT	FOR REFUND	
1	Aranco	, Lilibeth	1,300.00			1,300.00	389.01		
2	Caba	, Connie	1,300.00			1,300.00	389.01		
3	Commendador	, Wella	1,300.00			1,300.00	389.01		
4	Cueva	, Normina	1,300.00			1,300.00	389.01		
5	De Luna	, Octavio	1,300.00			1,300.00	389.01		
6	Diaz	, Artemia	1,300.00			1,300.00	389.01		
7	Escasinas	, Asuncion	1,300.00		1902.90	1,300.00	389.01		
8	Maravilla	, Jonah	1,300.00			1,300.00	389.01		
9	Montana	, Jojo	1,300.00			1,300.00	389.01		
10	Osabel	, Jerby	1,300.00			1,300.00	389.01		
11	Quisay	, Elena	1,300.00			1,300.00	389.01		
12	Rubilla	, Carla	1,300.00			1,300.00	389.01		
13	Tenedo	, Rosemarie	1,300.00			1,300.00	389.01		
14	Villanueva	, Grace	1,300.00			1,300.00	389.01		
15	Atillo	, Annalyn		1,400.00		1,400.00	289.01		
16	Catiwalaan	, Manilyn		1,400.00		1,400.00	289.01		
17	Montayre	, Catherine		1,400.00		1,400.00	289.01		
18	Nicon	, Roger		1,400.00		1,400.00	289.01		
19	Paler	, Norie		1,400.00		1,400.00	289.01		
20	Sagayno	, Cecilia	1,400.00		1900.00	1,400.00	289.01		
21	Villar	, Jonalyn	1,400.00			1,400.00	289.01		
22	Andales	, Jenny		1,900.00		1,900.00			210.99
23	Catabas	, Nida		1,900.00		1,900.00			210.99
24	Escalante	, Gina		1,900.00		1,900.00			210.99
25	Oliva	, Oliver		1,900.00		1,900.00			210.99
26	Pepito	, Renel		1,900.00		1,900.00			210.99
27	Sarno	, Marylou		1,900.00		1,900.00			210.99
28	Yase	, Nila		1,900.00		1,900.00			210.99
			18,200.00	9,800.00	13,300.00	41,300.00	7,469.21		1,476.93

+ 36 family paid.

42.400
47.400 → enough

結果

水道費については、値上がりの原因が判明、価格を適正化することに成功し、支払いを完了することができました。また現地住民、オフィサー間での水道プロジェクトに関する情報の共有については、共有の機会の提供を行い、一時的に緩和しました。今後の継続的な進捗共有については、現地で 1 週間ごとの定期集会を行うことが決定しました。

また、参加家庭数の不足についても、支払いこそできましたが、新しい課題（過払い家庭への返済）が浮上することになりました。

-----水道着工後（2014 年夏以降）-----

発生した課題 ～2 つの重大な遅れ～

2014 年夏渡航の時点で完成しているはずの水道。しかし日本から現地に連絡を続けても、完成の報告はありませんでした。また建設費の不足額を立て替えた家庭への返済についても進捗は不明。現地に行って状況を確認したところ、やはり以下のような課題が発生していました。

- ①水道建設工事は始まっているが。大幅に遅延している。
- ②新規参加者が集まらず、返済が全く進展していない。

課題へのアプローチ

①工事が遅れている原因の調査



←現場の写真。
一日 6 m しか進んでいない。

工事現場スタッフへのインタビュー

実際に工事現場に赴き、作業を進めるスタッフに工事が遅れている原因についてお話を伺いました。

水道会社への訪問

オフィサーとともに水道建設会社を訪問し、担当者たちを交えて工事が遅れている原因と完成時期を尋ねました。

現地 NGO への訪問

フィリピン マンダウエ市内で水道支援を行っている NGO に訪問しました。目的は当事者以外からも水道建設の遅延に関する原因分析を行うこと、また今後の対応についてアドバイスをもらうことです。

②経理状況の確認と返済手段をオフィサー、住民で議論

各家庭の出資状況を全体で共有し、現状全く進展していない過払い家庭への返済をどう行っていくかをオフィサー、住民で議論するために集会を開きました。

そこで各家庭が払った金額と返済が必要な金額を全体に共有し、今後の行っていく返済方法について決定しました。(↓オフィサーから経理状況の共有をうける住民の様子)



結果

①判明した原因と今後の対応

現場スタッフから挙げられた遅延の原因

- ・工事が遅れているのは大型の重機を現在使用できず、手持ちの機械で工事を行っているため。
- ・人員の不足しているため

水道建設会社から挙げられた原因と完成予定日

- ・大きな機械が壊れていて、小さな機械で代用しているため、

- ・人手不足でスタッフが週末にしか働けないため
- ・地盤が想像以上に固いため。
- ・完成予定日：遅くとも9月下旬、可能であれば8月中

現地 NGO の原因分析とアドバイス

・原因分析

最初に水道工事の代金をすべて支払ってしまったことが、水道建設会社側からプレッシャーを取り除いてしまったことも関係している可能性があるという指摘を受けました。

現地では建設代金を一括ではなく建設工事の進捗に応じて何回かに分割して払うことが通例となっていることが判明し、実施前の調査不足が反省されました。



・アドバイス（今後の対応について）

着工後行える対応として、水道建設会社に工事にあたるスタッフを増員するように要請することが挙げられました。現地組織のオフィサーに伝達し、必要であれば彼らから行える状態にしました。

②返済に充てる資金の元手を、「新規参加者の出資分」から「現在参加している家庭で平等に負担」に変更

住民と現地住民で議論した結果、過払い家庭への返済は早急に対処すべき事案だと認められました。そのため新たな家庭のプロジェクトへの参加(出資)を待つのではなく、現在いる参加家庭で不足額を返済することに決定。不足額は各家庭に等分され、現地組織の経理担当者が回収、管理、返済を行います。

次の渡航に向けて

遅くとも9月下旬に完了すると言われていた水道の建設工事についても未だ現地から完成の報告はなく。また過払い家庭への返済についても実施中であり、次回渡航までに完結するか不明です。日本からも現地組織に連絡し、定期的に現地の情報を集めつつ、次回渡航でも柔軟な対応を行えるように準備していきます。

2.オフィサー改選

発生した課題 ～オフィサーシステムの機能不全～

2013 年夏に設立した FEST-PINAHAGBONG。プロジェクトを中心になって運営していく重要な組織ですが、仕事が忙しい等の理由でオフィサーの活動に来ることができないオフィサーがいる、また、前回 FEST が渡航した時以来、オフィサーが一度も集会を開いておらず、住民との情報共有どころかオフィサー内での情報共有も行われていなかったため、水道の進捗状況などを知っているのがオフィサー代表のみだったなど、現時点で十分な機能を果たせていませんでした。それにより現地住民からの不満や不信感が募りました。また当時のオフィサーから「これから仕事が忙しくなり、オフィサーの仕事を十分に果たす事ができなくなるため、他の人に代わりたい。」などの再選挙を望む声が多くあがったため選挙を行う必要があると判断しました。

課題へのアプローチ

上記の課題に対し、現オフィサーや現地住民と協議した結果、FEST - PINAHAGBONG のオフィサーを選びなおす「再選挙」を実施することを決定しました。

住民が投票権を持つ条件

まず初めに、家族の多い候補者が有利になり、その他の候補者が不利になってしまう事を防ぐために、一家庭につき一票ずつというルールを設けました。

選挙権については、「住民全家庭に一票ずつ与える」もしくは「水道プロジェクトに参加している 45 家庭に一票ずつあたえる」の二通りあり、FEST としては、より平等である「住民全家庭に一票ずつ与える」を推奨する予定でしたが、水道プロジェクト参加家庭から「水道プロジェクトにお金を払って協力している家庭と、そうでない家庭が平等に扱われるのは理にかなっていない。」「水道プロジェクトに参加していない家庭は、今まで参加する時間があったにも関わらず参加しなかった。それは FEST のプロジェクトに対する興味が薄いという事であり、今になって選挙への参加を約束し、投票権をもらうのはおかしい。さらに、そのプロジェクトに参加していない家庭の票で投票結果が左右されてはいけない。」等の声があがったため、「水道プロジェクトに参加している 45 家庭に一票ずつ与える」を条件とすることにしました。

候補者の決定

候補者の決定については、選挙前に住民に各役職に候補者を推薦してもらい、推薦された候補者本人に意志確認をし、その役職に出馬してもらうという形と、自ら立候補してもらう形をとりました。出馬していた役職に落選した場合、残っている別の役職に再度出馬する事ができます。なお、三等親以内の血縁者が複数オフィサーに選ばれる事はできません。

投票の形式

まず、あらかじめ水道プロジェクトに参加している 45 家庭に投票用紙の引換券を配布し、当日投票会場にきた家庭には引換券と交換で投票用紙を渡しました。なお、投票用紙は全部で五枚あり、役職ごとに色分けされています。

そして、投票についてはプレジデント→副プレジデント→秘書→経理→監査の順で候補者推薦→その場で意志確認→投票という流れで行いました。予定では期日前投票を行う予定でしたが、候補者が少なかったため、投票当日にさらに候補者を募りました。

結果

各役職に複数の候補者があがり、特に大きな問題も無く円滑に投票が行われました。後日選挙の公平性を確認するために住民に尋ねてまわったところ、「平等な選挙だった。」「うまくいったと思う。」などの意見が挙げられました。しかし、「投票権を持っても投票に来ない人がいた。」などの意見もあげられ、新組織とともに取り組んでいく課題となります。



3. ニーズ調査および新プロジェクトへの移行

発生した課題 ～プロジェクト移行への障害～

私たちは 2014 年夏渡航前の計画の段階で、水道プロジェクトが完結に近づいていることを想定し、次の段階（次のプロジェクトの立案とファンドの設立）への移行を視野に入れていました。しかし、現状として支援を次の段階に移行するうえで以下のような課題がありました。

- ・最後にニーズ調査をしたのが 1 年前であり、現地の ニーズが変化している可能性がある
- ・水道プロジェクト完結後予定されているファンド設立の成果が住民にとって実感しにくく、住民からオフィサーへの不信感が生じる可能性がある

ファンドの設立から運用までの移行が遅れば住民にとっては出資した成果を実感できず、現地組織への不信感を抱きかねません。そうなれば現在のプロジェクトはもちろん、次に立案されたプロジェクトにも支障がでる可能性があります。移行をスムーズにするため、現時点から次のプロジェクトを立案する準備をする必要があると考えました。

課題へのアプローチ

アンケート調査及び新プロジェクト立案のための集会の実施

FEST とオフィサーでアンケートによるニーズ調査を住民全体に行い、結果を集計します。その結果を集会で開示して住民全体に共有、住民の手によって次のプロジェクトを立案し、現地組織を中心に新たなプロジェクトを立案し実行に移していきます。

結果

「中止」

中止の理由

2014 年夏渡航時に現在行っている水道プロジェクトが予定より遅れていることが判明、私たちの渡航期間中に水道を完成させることは不可能でした。そのため現在のプロジェクトが完結していない状態で次のプロジェクトを立案するのは実質的に不可能でした。

そのため住民の現在のニーズを調査するヒアリング調査を実施しました。その結果、リファンド整備、洪水問題、職、教育の 4 つに意見が集まりました。しかし、なにより 1 番に住民の声が上がったのが水

道プロジェクトの完結とリファンドの整備でした。そのため水道プロジェクトを完結させることと、住民が不信感を抱くことなくプロジェクトがスムーズに進むような状態を作るために、ベースであるオフィサー制度を確実なものに構築することが、現状住民とオフィサーのために最優先するべきであると判断しました。

以上からニーズ調査および次のプロジェクトへの移行への準備を中止しました。

4 現地との交流

FEST が現地駐在を行わず年 2 回の渡航で支援を行っており、団体紹介を含めた現地住民とのコミュニケーションは重点を置いて行っています。また、現在住民から挙がっている FEST-PINAHAGBONG オフィサーへの不満、不信感を緩和するべく FEST・オフィサー・住民の 3 者間の協調、相互理解を図るプロジェクトを実施しました。

ワールドカフェプロジェクト

実施内容

ワールドカフェという、リラックスして様々な意見が出やすくなるような空間を意図的に作りだす話し合いの手法を用い、「ピナハボンで日本食レストランを成功させるには」というテーマの下 5 つの班に分かれて話し合いました。このテーマは住民から寄せられたものです。話し合いの内容は模造紙にまとめ、最後にグループごとに発表しました。また、日本食のお好み焼きを現地の方と一緒に作り、交流を図りました。



当日はワールドカフェに 26 人、お好み焼き配布に約 80 人が参加しました。ワールドカフェでは現地の方が積極的に議論を行い、発表も現地の方主導で和やかに行うことができました。

その後行ったフィードバックでは、「ワールドカフェでビジネスマインドを養うことができた」など好意的な反応が多く寄せられました。また、次回やる場合のテーマについて伺ったところより具体的なピナハボンの問題についての議論をしたいなどの声も挙げられました。

ピクチャーボードプロジェクト

実施内容

住民に体を使って一人ひとり違ったポーズをとってもらい、写真をつなげるとハートの模様が浮かび上がってくるようなコラージュ写真を作りました。最後写真をボードに貼っていく作業はピナハボンの子供と共同で行いました。

写真を通したプロジェクトでしたが、出来上がったピクチャーボードの飾り場所が確保できていなかったこと、完成作業に参加してくれた人が集会後で少なかったことなどもあって、あまり多くの人に見てもらえませんでした。また、コラージュ写真と普段撮影する写真が明らかに違うため、このプロジェクトが根本的な解決になっているのかというのも考えられます。しかし、このプロジェクトをともに作り上げることを通して英語が話せなくて交流が少なかった住民とも関係できたことができたことは大きな成果として挙げられます。



日記プロジェクト

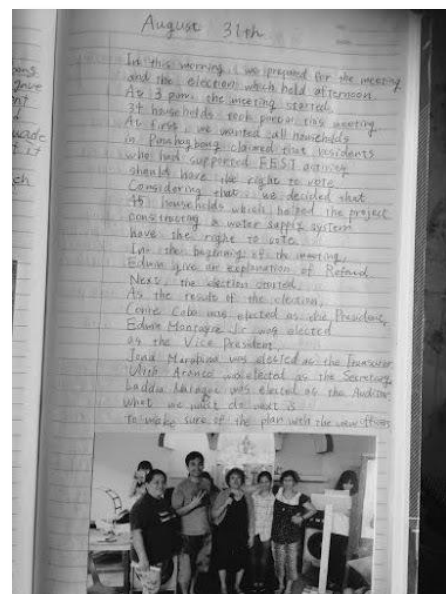
実施内容

FESTの団体説明や、前回渡航で行ったことなどを細かく記載した日記を現地組織のオフィサーに預けました。また、写真を使うなどして、ビジュアル的にも楽しめるように工夫しました。

《2014年春実施》

日記を読んだ住民が続きを自主的に書いてくれていました。このことは、今後日記プロジェクトが片方向の一時的なプロジェクトで終わることなく、双方向にとって有益なプロジェクトとして今後さらに発展進化していける可能性を実感できた大変喜ばしいものでした。

一方で、ピナハボン内でフィードバックをとった結果、一部の人たちにしか読まれていない現状が判明しました。保管場所などにあまり配慮することなく、オフィサーにただ渡しただけ、となってしまったことが原因だと考えられます。また、内容に関しても、前回渡航の概要などを細かく書きすぎてしまい、記録としての意義はあるものの、気軽に読むにはやや難しい内容になっていました。



《2014年夏実施》

手芸や日本についてなどのコラムも盛り込みました。2014年渡航では日記の作成と寄贈までを行ったので、成果については次回の渡航でフィードバックをとってから検証することとします。現時点での反省点として、日記の作成を少人数で行っていたため内容が単調になってしまったことがあげられると思います。今後も試行錯誤を続けつつ、増やして飽きの来ない日記にしていきます。

うどんプロジェクト



実施内容

住民・オフィサー・FEST メンバー間の交流を図るべく、共同で、「うどん」を作りました。

うどんに決めた理由は以下の4点です。

- ・材料と器具が調達しやすい
- ・調理が簡単
- ・生ものを使わないので衛生的にも安全
- ・みんなで協力して作ることができる

オフィサー・住民・FEST メンバーが参加し、三者間の交流の場を提供することには成功しました。しかし、うどんが茹で上がるまで時間がかかり、途中で帰宅してしまった住民もいました。また、フィリピン人は油っぽく、日本人と比べ味付けが甘い料理を好むらしく、うどんが現地の方の口には合わなかったようでした。

仮説の観点からみた現状分析

ピナハボンでの仮説

社会的・経済的低受益者は自らの問題を解決するために十分な能力を持っている。しかしそれが発揮されていないのは行動契機の不足、社会的抑圧、組織体制の欠落、資金不足によるものである。

＊社会的・経済的低受益者→ピナハボンの住民

仮説を証明するために

ピナハボンでは仮説の証明と同時に住民が自分自身で問題を解決できる状態を目指しています。その理想を達成するための行動として、まず **FEST** が住民に対し初動機会を提供すると共に初期の資金提供を行います。次に自助組織と共同で、資金運用を伴う問題認識・立案・実行のサイクルを開始します。そしてそのサイクルが回った段階で理想の状態が達成されたこと、そして仮説がどの程度証明されたかを確認します。またプロジェクト実施において、現地住民だけでは難しいと考えられる外部訪問などは **FEST** 側から積極的に関係していきます。

現状

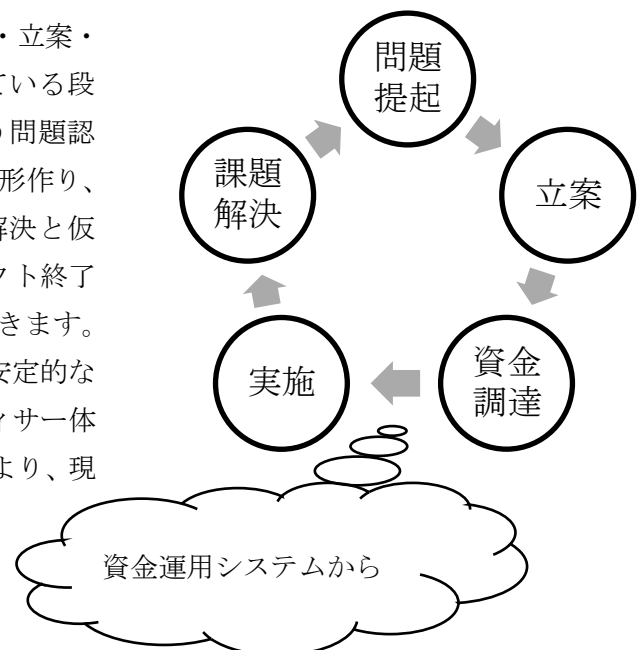
ピナハボンでは 2013 年夏から開始した水道プロジェクトが終盤にさしかかり、現地において一つの成果を残そうとしています。現状として①初動機会の提供、②初期の資金提供を、水道プロジェクトの決定、実施を通して現地に提供しています。しかし、現状としてこの 2 点の阻害要因の減少のみで住民自身が完全に問題を解決できているとは言えず、仮説に設定しきれていない阻害要因が何かしら残存していると考えられます。水道プロジェクト実施の際、現地オフィサーは自らが中心となり、水道会社との交渉を行い、発注まで至りました。この事実に対しては彼らのプロジェクト実行能力が認められます。一方で **FEST** からの資金提供は行ったが住民側の資金問題が発生しており、現状として **FEST** が今後とも何らかのサポートを行っていくことを求められる状況にあります。また、プロジェクトの立案といった初動機会の提供においてもオフィサー組織を作ったが住民間で組織をうまく動かすことは難しく、組織の完全な確立にはまだ時間がかかる模様です。

今後の展望

現在は現地組織と共同で、資金運用を伴う問題認識・立案・実行のサイクルをさらなる阻害要因の削減を目指している段階にあります。具体的な行動として、資金運用を伴う問題認識・立案・実行のサイクルを一つのロールモデルとして形作り、それを繰り返していくことで住民のみ手による問題解決と仮説の証明を図っていきます。そのため、水道プロジェクト終了後は次の問題提起とプロジェクト立案へと移行していきます。また、資金面においては資金運用システムを構築し、安定的な資金の調達を目指す。そしてこの 2 つの行動からオフィサー体制を安定的かつ確実なものへと成長させていくことにより、現地の生活向上を目指していきます。

(ピナハボン現地責任者 木村茉莉)

ロールモデル



谷理乃(たに あやの)

NGO FEST OHITA 第1期代表



今までの FEST の活動で一番印象に残っていることは何ですか？

やっぱり設立ですね。設立と言っても FEST 大分設立っていう事実だけじゃなくて、それに関わるすべてのことかな。例えば、FEST 東京での設立プレゼンもそうだし、設立前に FEST 広島の渡航に参加したのも含めて印象に残っています。

あなたにとって渡航とは何ですか？

自分の悪いところや弱い面に気づかされるかな。少し渡航前の話をすると、私が代表になったばかりの時、3 代表での会議が良くあったんだけど、その時の自分は甘えもあり、遠慮してしまいあまり自分の意見を言わなくて…。でも、メンバーが増えていくにつれて代表としての自覚や責任が出てきて、それぐらいの時期から会議でも意見を言えるようになったし、しっかり考えることが出来るようになったかな。その話をこの前の夏渡航で大野君 (FEST TOKYO 現代表) とすることがあって。その時、大野君から「あの時は、なんでこの人が代表やっているんだろうって思ってた」って言われて…たしかにそうだったなと思いました。(笑)

こういう事を言ってくれる人がいるから、今までの自分を顧みることができる。なので、渡航は今の悪いところだけじゃなくて、今までの自分の悪いところや弱い面にも気づけることが出来る場だと思います。

FEST-HIROSHIMA の FEST-TOKYO とはここが違うところ？

みんな何歳か分からないとこかな(笑)

外から見ていると、各々がみんな意見を言いあって、年齢や学年、FEST 歴とか関係なくみんな活動していて…そんなところを見ていると、みんなの年齢が本当に分からない！(笑)

これからの FEST OHITA の展望をお願いします。

九州だと福岡は大都市で福岡以外の地域はすごい疎外感を感じるんですよ(笑)

私、もともと滋賀県に住んでいて、大分に住み始めたときすごい疎外感を感じて…なんか大分って内向きというか、良く言えば地元愛が強かったり、地元活性化なんだけど、それが勿体なく作用していて。

FEST 大分がそういう内向きな思考を変えたいな。一歩外に踏み出したいなとか違う世界を見てみたいなとか思っている人が、もっと気軽に国際協力という活動が出来るっていうところを、FEST 大分を通して見て欲しいです！すごいこれは思っていることです。

(インタビュアー: フォトワーク事業部 竹村帆丘)

支援活動

対象地域：パライ

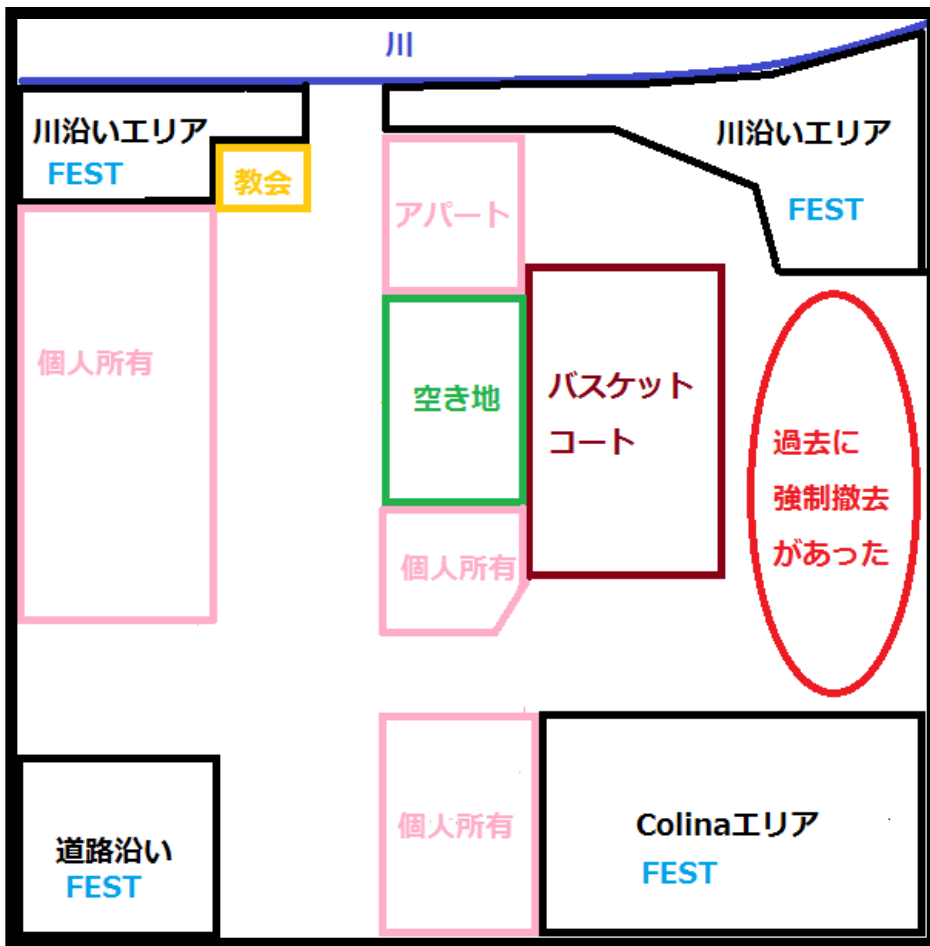
February.28～march.31 / August.12～September.9



フィリピン共和国 セブ市 カサンバガン地区 パライ (Paray)

2010 年団体創設以来支援を続けている地域です。周辺でセブ市内でも特に近年開発が進んでおり、一部地域が強制移住を求めた取り壊しを行われるなどの脅威にさらされている他、氾濫しやすい川とも隣接しており、洪水による被害も深刻です。

(FEST と書かれている場所がプロジェクト対象地域)



川沿いエリア

世帯数→72

総人口→301

土地状況→国有地占拠

血縁関係によって構成されたコミュニティであり、経済状況から見ると3つのコミュニティで一番水準が低い。

川に隣接しているため、悪臭や洪水の被害が一番大きい。

道路沿いエリア

世帯数→13

総人口→77 人

土地状況→私有地(銀行所有)占拠

血縁関係により構成されたコミュニティ。2012 年春に行われた強制立ち退きにより現在の位置に移動。経済状況としては他と比べると中間といえる。

バーベキューなどの飲食系のスモールビジネスを積極的に行っている人がある。

Colina エリア

世帯数→29

総人口→145

土地状況→所有権あり

その名の通り「Colina」という一族が生活している。生活水準としては一番高く家もコンクリートやタイルで作られている。しかし洪水や子供の学費捻出が難しいなどの問題は存在する。

パライには大きく分けて3つのコミュニティが存在しています。そのためそれぞれのエリアで状況も大きく異なり、例えばある住民は一般にスクワッター(Squatter)と呼ばれる不法居住者で、一方では自分の土地を有している住民がいます。

しかしそれぞれが完全に孤立している訳ではなく、各コミュニティのリーダー層による定期ミーティングや、若者たち主導のバスケットボールの試合など様々なイベントが行われています。

現地協力者

各コミュニティのリーダーでプロジェクトに積極的に参加、協力している現地住民の協力者の3名です。



Rheswy Colina

FEST がパライでの活動を始めたときからプロジェクトへのアドバイスやサポートをしてくれている女性。英語が堪能であり彼女自身、昔日本の NGO の奨学金支援により大学へ進学することができたという経験があり、教育学部・経済学部を卒業している。現在は法学部に所属し、学業に励んでいる。



Chona Lim

川沿いエリアにあるサリサリストアの経営者。自身のエリアでは住民組織のリーダーであり、なおかつ他のエリアの住民とも積極的に話を出来る女性。FEST の考えや目的を現地住民に訳してしっかりと伝えてくれるなど多くの場面で協力をしてくれる。



Jamester Jakosalem

道路沿いエリアに住む青年。
仕事はマーケットでの配達業務をしており、若者達の中の中心的存在。FEST への協力はとても積極的で、最近道路沿いエリアのリーダーとして住民からも認められてきている。

支援内容

プロジェクト実施項目

- ① 教育プロジェクト ② The Last Project プロジェクト ③ 現地との交流

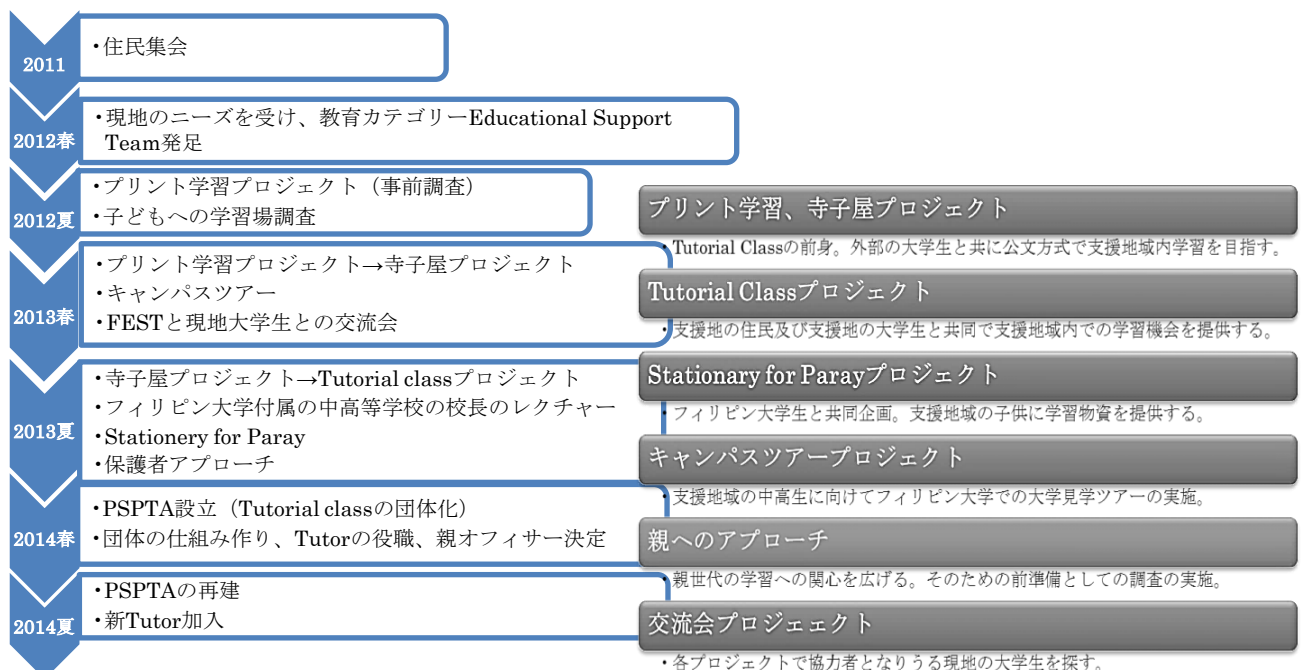
①教育プロジェクト

フィリピンの教育問題

一般的に、フィリピンの教育水準は高いと言われています。しかし、初等教育の現場では約 30%の子供が卒業しないまま学校を離れている問題が存在し、その背景には、子供に労働力を求めるしかない経済的要因、深刻な教員・教室・教材不足などが挙げられます。よって、フィリピンでは深刻な教育格差、さらにはそれに起因する経済格差が問題となっておりその改善は重要な課題とされています。この課題への解決策として近年導入された K+12 制にも教育現場は未だ対応できていません。学歴と収入が密接に結び付く学歴社会のため、十分な成績がないと卒業や奨学金も得られず、大学にも進学できず、世代間にわたる貧困のスパイラルから抜け出すことができない現状が存在します。

教育プロジェクトの変遷

第 1 回集会で現地から上がった教育に対するニーズに対応するべく、支援地の子どもたちに基礎的な学習環境を提供し子どもたちの学力の底上と勉強への習慣づけを行うことを目指すために立案されました。現在は「パライ住民の働きかけにより行われる教育活動が確立している状態」を理想としています。



Tutorial Class の概要と初動

Tutorial Class は、現地の教育問題の解決を目標に据え、学校で受ける基礎教育を補てんする内容の授業をパライ内の Elementary School 生徒に対して行っています。初期段階では住民の中で意欲のある学生を教師として採用し、Rheswy を筆頭としたパライ内の学生が教師役として Tutorial Class を運営していきました。



発生した課題 ～継続性への不安～

支援地内の学生を教師役として採用したため、彼らが授業を就職活動や大学卒業してしまうと、**Tutorial Class が断絶してしまう可能性があること**。また組織化されていないため授業の質が Tutor 個人の能力、趣向に由来し、向上をしていくためのノウハウの蓄積や、外部協力者の確保も難しい状況にありました。

課題へのアプローチ

Tutorial Class を行う現地組織、「PSPTA」の設立

Tutorial Class に積極的に参加していた CTU(Cebu Technological University)の学生 Caila を中心に、パライにおける教育事業を行う現地組織の設立を目指しました。設立に関しては、**保護者の参加を得ること**、**Tutor の役職、親オフィサー決定すること**、そして **FEST との連絡体制を決定すること**を必須条件としました。

結果

PSPTA の設立完了。詳細は次ページから。

PSPTA



正式名称 Paray Students Parents and Tutors Association

構成(2014 夏以前) CTU(Cebu Technological University)の生徒 5 名
パライの青年達 5 名
パライの親(Tutorial Class に子供が参加している) 6 名

役割 Tutorial Class の運営及びその際に必要となる物資の調達
親の目から見た Tutorial Class の評価
親と Tutor の協力によるより効果的な学習の提供

Vision To use their learning in their high school years.
To become a role model to their next generation.

Mission To enhance the children's knowledge and improve each of their skills.
To improve each knowledge of the co-tutors.
To boast self-confidence during Tutorial Class.

Goal To be able to get more students to attend in our Tutorial Class.
Students become motivated and do not stop in their students.
They don't have failing marks in their school.

FEST との連絡体制 Facebook グループページを使用



PSPTA の活動

Tutorial Class

毎週日曜日、午後 14:00 からパライ内教会で行います。対象となる学年は、Kinder、Elementary 生(1.2 年生)、Elementary 生(3.4 年生)、Elementary 生 (5.6 年生)に分けられます (Kinder は日本で言う幼稚園児、Elementary は小学校)

授業を行う科目は英語、フィリピン語、数学、理科。授業の内容や構成は授業を運営する PSPTA のメンバー (**Tutor**) が決めていきます。



Culminating party

生徒の学習意欲向上を図り、Tutorial class の成績優秀者にリボンとメダル授与しました。



発生した課題 ～形骸化した現地組織～

PSPTA を設立したことにより、Tutorial Class の継続的な実施と授業内容の質的な向上を図れると考えていました。しかし、2014 年春渡航から夏渡航の間に Tutorial Class が停止。PSPTA の団体化は「形だけ」になっていました。

PSPTA の状況

- ・ 支援地 Tutor コミュニケーション不足（連絡の中心となっていた PSPTA のリーダーが大学を休学したことで、他の Tutor たちと接触できなかったことが原因）
- ・ 現状 Tutor の人数が少なく、一人一人の負担が重い。
- ・ Tutor の多くが大学 3 年になっており、就職活動で忙しい
- ・ 親オフィサーが PSPTA の監視を十分に果たせていない

また、FEST がいない時期の Tutorial Class には参加する子供が少なく、学習習慣の定着には至っていません。しかし、Tutorial Class の存続を望み、自分の子どもを通わせたいという現地からの要望は強くありました。

課題へのアプローチ

PSPTA 再建へ

現在いる Tutor の就職活動が始まり、且つ組織体制の変革が必要なことから PSPTA の再編成を行いました・

EYES HERE!!!!

**We are looking for a new
VOLUNTEER TUTORS.**

Let's Teach !!

Have Fun & Enjoy!!



Where: Paray Kasambagan Cebu, City

When: Every Sunday(2pm-4pm)

Subjects: Mathematics, English, Filipino, Science

Educational Support: NGO FEST from JAPAN

①新 Tutor 募集

よりモチベーションが高く、継続して PSPTA を運営していけるように、新しい Tutor は CTU の教員志望の学生から得ることにしました。

PSPTA を通して彼らに実践的な教育の現場と日本の NGO である FEST から Certification（活動証明書）を提供します。また、教員志望の生徒に貧困改善を目指した教育活動の機会を提供することによって、教職員の人材育成に寄与する意義もあります。

実施は CTU 生の Tutor が主体となり、同大学にポスターを掲示、配布して新 Tutor として参加を希望する生徒を募集しました。

②Tutor の任期決定

課題となっていた Tutor のモチベーション低下、就職活動など各個人の都合による自然消失に対して解決策を PSPTA メンバーと協議しました。課題の原因分析したところ、オフィサーの任期の未決定が大きな要因であると考えられ、解決のために任期設定を行うことになりました。

任期が決まっていないと、Tutor が時期的な目標を決定できないうえ、短期間での参加も難しくなります。また任期が設定されれば、新メンバーの募集も定期的に行うことができ、継続的な組織運営を行うことができます。

③PSPTA への親の参加の促進

PSPTA の活動に対する保護者達の参加を得るため、クロスワードパズルを用いたレクリエーションを行いました。クロスワードパズルを用いたのは、チュートリアルクラスに参加している子供の学力向上を、「語彙力」から保護者に認識もらうことで、FEST、PSPTA と保護者の交流を兼ねながら教育活動への関心を向けてもらう機会を提供するためでした。

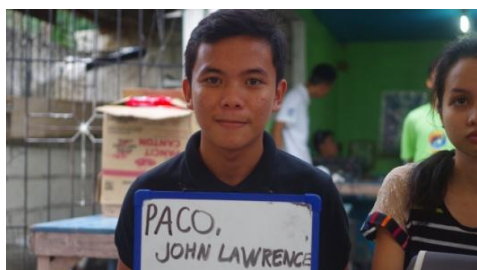
結果

新 Tutor 募集

結果として 14 人の新 Tutor が加わり、組織体制を一新。初期からいる Tutor と合同でミーティングを行い、全体を管理するオフィサー4 役職を設置、推薦制の簡易な選挙で人員を決定しました。

オフィサー

- 代表：PSPTA のリーダー。今後の Tutorial class の方針や、PSPTA 全体のマネジメントを行う。
- 副代表：代表不在時の代理等、代表のサポートを行う。
- 秘書：ミーティングの記録や、所属しているメンバーを記録した名簿の作成、管理を行う。
- 会計：PSPTA が活動するための資金管理を行う



President: John Lawrence Paco



Vice-president: Melge Reyes



Secretary: Nemely Malay



Treasurer: Shirley Mosqueda

選挙の様子



任期

PSPTA メンバーとミーティングを重ね、原則加入から半年間と決定しました。期間の延長、短縮については本人の希望とその時々の PSPTA の状況次第で対応していきます。

親子レクリエーション

レクリエーションの開催はできたが、予定された日に親たちが家事や仕事で忙しくて集まらなかったため、ほとんどが子供のみの参加となりました。

今回のプロジェクトで PSPTA に親の参加を促すことができたとはいえ、今後も取り組んでいくべき課題として持ちこされることになってしまいました。



②The Last Project

支援地からの撤退を見据えた、“Last Project”

教育プロジェクト「Tutorial Class」の現地組織設立を達成し、教育に関しては FEST 撤退後もプロジェクトの実施が可能な状態になりました。また FEST が有意義な協力関係を築けることが実証できたことで、現地住民からも信頼、期待される状態へととなりました。

そこでこのプロジェクトでは、住民から、「FEST と共に自分たちで解決したい問題」を挙げていただき、現地でプロジェクトチームを設立、FEST がサポートしながら問題解決を行っていきます。このプロジェクトを通して彼らの問題解決が成功し、社会的な抑圧など様々な要因に対処しながらパライ住民自ら生活を向上させていける状態になれば、FEST はパライから撤退します。

プロジェクトは未だ初期段階、まだ大きな問題には直面していません。本項ではこのプロジェクトの書道となった 2014 年夏渡航の活動内容を報告させていただきます。

①第 1 集会：住民へのプロジェクト説明とアンケートの実施

目的：パライの住民に新プロジェクトでの現地との関わり方を理解してもらう。

住民が抱える問題を把握する。

方法：新プロジェクトでの現地との関わり方については説明した現地語の資料を配布し、英語で説明。

同時に現地協力者 Chona に現地語訳してもらった。アンケートは記述式で記入してもらう。（複数回答は英語・ビサヤ語どちらでも良い）

（配布した資料と実際に記入してもらったアンケート）

FEST

The Last Project
~ open your path ~

1) Panan-ang Projects
So pagmagdang sa among tutorial class ang FEST kay magtutugon sa mga problema sa Parag.

Kini Project pinanagi sa Educational Project. Kami mga FEST monang og solution sa mga problema sa Edukasyon og unsan pagsubad niini. Sa pagpangin anin na projecto kami mga FEST na studente motabag ka ningo sa pagsubad sa ningo mga problema.

Ikaadha Ang among experience sa pagsubad sa problema pinanagi sa among kagalingan makatubag pud sa ningo unadonka kasabidha Ang among mga experience sa parag makatubag sa ningo.

2) The Last Project

(1) Amo sutaon kung unsa ang problema og unsan pag subad ani sa pagtabang sa FEST.

(2) Amo taon kung kamo mga tao kamo mo subad Niining problemaha.

(3) Sa tinao mga membro og sa mga solution sa problema, kami motabag og sa ala organizasyon na pinanagi sa mga problema.

(1) Problem (2) Passion (3) Member The Last Project

Educational Project

③ Mang Grace Bulocan P.A.
Amo sutaon kung unsa ang problema og unsan pagsubad ani sa pagtabang sa FEST.

1. Pinansyal Problem
2. Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta
3. Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta
4. Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta
5. Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta

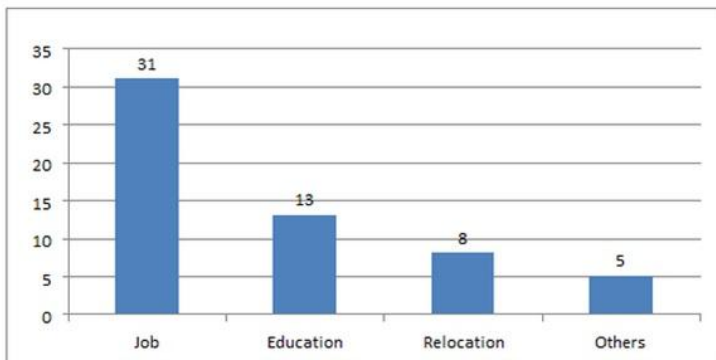
④ Amo sutaon kung unsa ang problema og unsan pagsubad ani sa pagtabang sa FEST.

Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta
Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta
Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta
Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta
Ang mga problema sa kaniyang mga gawianon ng kani na unta

②第2集会：住民へのプロジェクト説明とアンケートの実施

目的：第一集会で行ったアンケートの結果を住民に共有する。また、プロジェクトメンバーを募集し、新プロジェクトを立ち上げる。

方法：集会を FEST が集計したアンケート結果を共有。その後、挙げられた問題に対して解決するモチベーションがあるメンバーを募集し、プロジェクトチームを編成する。もしメンバーが集まらなかった場合、プロジェクトは実施しない。



左がアンケート集計結果。

地域別にみると Colina エリアでは Education、道路沿いと川沿いでは Job を問題に挙げる人が最も多かった。また、Job と Education を同時に挙げる回答もあり、そのいずれもが教育費のために仕事がほしいという意見だった。

結果

第1集会

説明後配布したアンケートは自分が主体的に動くことが前提として記入されており、プロジェクトや FEST のとるスタンスへの理解が得られました。（アンケートは全部で37枚回収）

第2集会

Job と Relocation(強制移住への対処)に対してのプロジェクトチームが結成されました。また、Education のプロジェクトはメンバーが集まらなかったため、行わないことにしました。

その後住民自らメンバーおよび役職を決定。代表、副代表、経理、監査という役職の決定にまで至り、今後の方向性についての議論が活発に行われていました。（写真は議論後のリロケーションチーム）



仮説の観点からみた現状分析

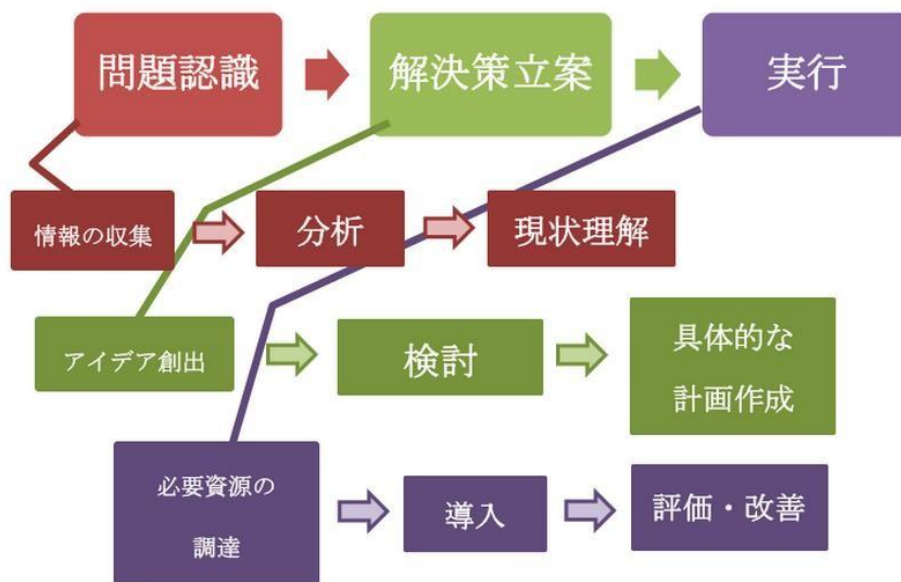
【仮説】

「スクワーターエリアの住民は自ら問題解決を行うだけの能力を備えている」

【仮説を証明するために】

まず、仮説にある、問題解決能力は大きく3つに分けられ、さらに各過程があると考えています。そのため、住民の能力が発揮されているかどうか、またその能力を発揮できなくしていた要因が何かを各段階で検証していきます。

- ・ **問題認識**: 情報収集→分析→現状理解
- ・ **解決策立案**: アイディア創出→検討→具体的な計画作成
- ・ **実行**: 必要資源の調達→導入→評価・改善



パライにおけるかつての支援は、ニーズを調査→FEST がニーズをみたすためのプロジェクトを立案→住民が参加し、実施 という流れでした。特に教育プロジェクトについては、まずこの仮説が設定される以前からあったプロジェクトであるため、そのやり方やアプローチが直接この仮説の立証と重ならない部分があるということを述べておきたい。特にプロジェクトの立案や設計に関しては FEST が行ってそれに対して住民からアドバイスをもらうという形式をとっていること、また最終的に現在は支援地住民ではなく外部のフィリピン大学生と連携して行っているため住民が必ずしもメインの協力者であるとはいえないこと、が仮説の立証とは違うベクトルでプロジェクトの運営を行っている点であります。

しかし、そもそもこのプロジェクトも住民へのプロジェクトの中心的役割の移譲というのが目的とされており、その背景には住民自身でプロジェクトを回せるだけの能力があることを前提にしています。

従って、これまでのプロジェクトを振り返りその中で住民がどう行動し、関わってきたかを振り返って検証の材料とするのは非常に意義があると考えました。以下にその内容を記します。

【結論】

問題認識について

まず教育に問題があると感じる親は多かったので認識はしてしていました。そもそも我々がプロジェクトを起こしたのは住民集会での意見収集によるものだったのでそう言えます。

しかし、まずそういう場所を作らなければ住民から動くことがないこと、そしてそのことについて何か情報を集めるなど自らアクションを起こす人がいないことは間違いありません。もちろん自身の問題について何が原因なのかはそれぞれの家庭が意見として持っていました、それはお金や学習用のマテリアル不足というのが大半で、そこから更に掘り下げて理由を探るような人物は見受けられませんでした。

結果、FEST 側がプロジェクト案を出し、その中で行動するかしないか、という流れしかありませんでした。これは教育という問題が身近ではあるが緊急性の高い問題ではない、というのが作用していたと考えられます。

解決策立案について

この部分はほぼ FEST 主導だったと言えます。一部、パライ説明の項目にも記載していた現地協力者 Rheswy からプロジェクトに関するアイディアが出た場面がありましたが、それ以外は特にあがることはなく、そしてあがったものも計画を立てるということは特になく本当にただのアイディアの段階でそれを FEST 側が形にするというのが実情でした。ただ、基本的にプロジェクトをやる際には多くの住民から意見を集めて反映させるという形にしていたのですが、そのときは本当に多くの意見が寄せられていたのが現状のプロジェクトの様子を見て検討する力は十分にあると考えられます。

実行について

教育の中で一度 Rheswy さんがメインでプロジェクトを動かした際に彼女自身で教材を集めるというアクションが行われました。そしてそれを導入し、また工夫をしてという事を繰り返し行っていました。実際のところ、そのプロジェクト自体は彼女が忙しくなり、消滅してしまいましたが、このチャートに沿ったアクションが出来る人がいるのは間違いありません。それ以降についても China が住民に声掛けを行い参加を促すなど実際に動く人はいましたが、そうでない人の方が多いのは事実です。この点に関しては、FEST が主導でやるという形が定着したこと、教育に関しては問題意識の程度にかなりの違いがあること、が原因と考察しています。

まとめ

上述してきたようにパートごとで見れば住民がそれを出来るだけの能力を持っている可能性は見込まれるといえます。しかしこれの大部分は二人の女性によるものであり、冒頭述べたようにそもそもプロジェクトの作り方が FEST による提案型だったことから、今回の分析のみで有無を語ることはできません。今回の教育プロジェクトでの出来事、仮説検証の一つの可能性を示すものとして捉えていきます。

もう一点、今回の振り返りをしていく中で上記のフローチャートは概ね正確であるように感じました。しかしもっと細分化すればより住民の能力を具体化していくことができるので今後更なる改良を加えるのは必須です。

また、**The Last Project** では、このモデルからパライの現状を **Relocation** プロジェクトと **Job** プロジェクトの2つの面から評価しています。まず、**Relocation** プロジェクトについては、「解決立案」の「検討」と「具体的な計画作成」の間に位置していると考えています。また、**Job** のプロジェクトについては、「問題意識」の「現状理解」と「アイデア創出」の間の段階に位置していると考えています。しかし、両方のプロジェクトにおいて各ステップをスキップしている可能性もあるため、こちらも詳細についてはさらなる調査が必要となります。

(パライ現地責任者 大森樹)

③現地との交流

写真を通した現地への還元

支援地決定後、パライでは幾度も調査を繰り返し、1年の歳月の後に教育事業を開始しました。そのため住民からは関係している期間と比べ、成果が、成果が感じられにくく、「FEST が何をしているのか分からない」という意見を受ける時期がありました。そこで以下の目的の元、Family Picture Project、Another Sky Project を 2013 年の夏渡航、2014 年の春渡航、2014 年の夏渡航と継続的にパライで行ってきました、

- ①プロジェクトを通して住民とコミュニケーションをとっていくことで、メンバーと住民との信頼関係を構築する。
- ②写真アルバムを配布することで、現地住民に対する短期的な還元を行う。
- ③このプロジェクトを通して、FEST の説明を一家庭単位で説明していく。

FAMILY PICTURE PROJECT

実施内容

まず、住民へプロジェクトの説明を行い、インスタントカメラ配布します。数日後カメラ回収をし、写真を現像した後、FEST の海外事業部のチュートリアルクラスや新プロジェクトの内容を盛り込んだメッセージカードを入れ、アルバム配布を作成し、配布するという一連がプロジェクトの流れとなります。撮ってもらう写真に関しては、家族だけでなく、友達や景色など自由に撮影してもらいました。

現在のアルバム配布の状況

2013 年の夏渡航	川沿いエリア	20 家庭
	Colina エリア	5 家庭
2014 年の春渡航	道路沿い	16 家庭
	Colina エリア	8 家庭
2014 年の夏渡航	川沿い	16 家庭
	Colina エリア	4 家庭

配布したアルバムの状態

2014 年の春渡航(2013 年夏渡航分のアルバム)

- ・ 18 アルバム分の保存状態の確認。

2014 年の夏渡航(2014 年春渡航分のアルバム)

- ・ 24 アルバム分のフィードバックを試みた。一家庭なくしてしまっていたのと、所在不明が 1 家庭あったので 22 アルバムの保存状態の確認が取れました。



ANOTHER SKY PROJECT

実施内容の詳細

2014 年春(3 月 8 日、9 日)

大きめのボードを 3 枚用意して、1 枚には日本の写真、2 枚目は FEST メンバーの日本での一日の生活を時計の絵を使って写真つきで示し、3 枚目は、FEST の団体説明を写真つきで示すボードを作成しました。ボードの取り扱い方法としては、パライに入るたびにボードを持ち込んで、フォトワーク事業部メンバーがいる時間帯に展示・説明を行いました。展示場所は川沿いエリア、Colina エリア、道路沿いエリアの三ヵ所で、時間を決めてローテーションさせました。

2014 年夏(8 月 28 日)

FEST メンバーとパライ住民とのフェアウェルパーティー（渡航最終日に成果報告、ライ渡航の展望などを発表する会）の際、今回の渡航で FEST の活動報告を行っていく手段として写真展の開催を試みました。これは、自分たちが今渡航で行ったプロジェクトを不特定多数の人たちと渡航の振り返りを現地の人たち一緒にできることを目指したもので、大きめのボード 3 枚を使用し、2 枚で今渡航での海外事業部の活動(第一回集会、親子レク、チュートリアルクラス、第二回集会)を自分たちが撮った写真とビサヤ語でのキャプションで説明しました。残りの 1 枚で、マボロマップを作成しました。

これはキャプションを見に来てくれた人にパライの中であなたのお気に入りの場所はどこかということに住民の人たちに聞けるような環境にすることで、参加型の写真展となるように意図したからです。しかし、雨でフェアウェルパーティーを行うことができなかったため、写真展という形で行うことができませんでした。

現在の成果と反省

最大の成果は現地から、「FEST が何をやっているのかが分からない」という意見が 2014 年夏渡航以降寄せられなくなったことにあると言えます。もちろん、教育プロジェクトの進展が大きな要因としてありますが、地道に FEST の活動を紹介していくこれらの活動が実を結びました。





野本遥香(のもとはるか)

海外事業部パライ教育班

そもそもFESTに入ろうと思った理由は？

最初は国際協力のNGOに入ろうとは思っていなかったけれど、大学でそのような活動をしている人の話を聞いて興味を持つようになった。FESTは教育やフェアトレードなどのある特定の分野だけにとどまらず、コミュニティにニーズがあればできるだけそのニーズに合った支援を行い幅広い活動を行っているのが良いと思った。あと海外での支援だけでなく国内事業部があるという点で支援や発信のバランスがとれている団体だなあと考えてFESTに入ることにした。

FESTに入った時と今のFESTの印象の違いは？

意外と途中で FEST を辞める人が多いことかな。でもその人たちの話を聞くと、他にやりたいことがあって辞める人など、ただ単にFESTが面倒臭くなってやめたんじゃないくて真剣に将来について考えた上で辞める人が多いから決して悪いことではないんじゃないかな。

フィリピンや現地に行って印象的だったことは？

他のメンバーからの話を聞いて支援地に対してはひどいイメージを持っていたけれど、想像していたより生活水準はひどくはなかったことかな。

あと現地の人たちは音楽が好きで、支援地にカラオケ機があったのはびっくりした。

音楽は支援地の人にとって娯楽でありストレス発散になっているんだと思う。

FESTの活動を通して一番大変だったことは？

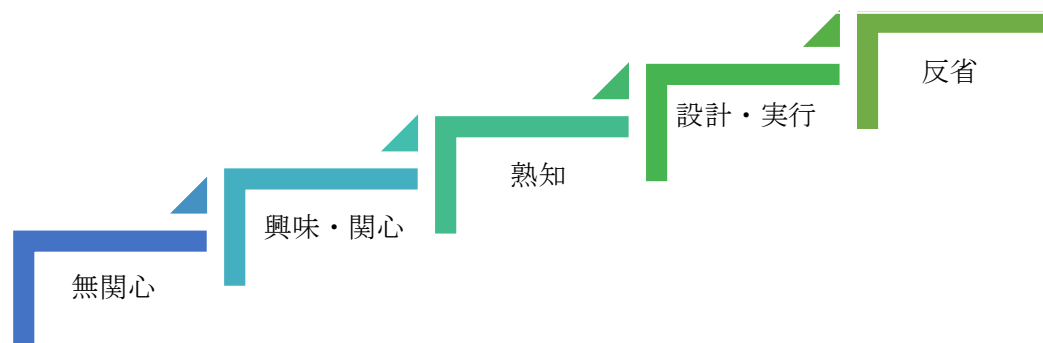
プロジェクトを進める中でチューターとやり取りをする際に英語が伝わらなかったり、コミュニケーションがうまくとれなかったりしたことが大変だったし、今現在も大変だと思っている。次の渡航の時までには英語をしっかりと勉強したいな。

これからFESTをどのようにしていきたい？

まずはFESTのメンバーの一員として積極的に意見を言ったり、行動したりしていきたい。またこれから新メンバーが入ってくるからその人たちにとって少なくとも悪いお手本にはならないようにしたい。プロジェクト内では、メンバーみんなで仕事を分担し、協力し合っていきたいな。またもし事務局長に選ばれたら、運営をしっかりと行ってFEST全体をしっかりと見渡してどのようにメンバーをサポートできるかを考え行動していけたらいいな。

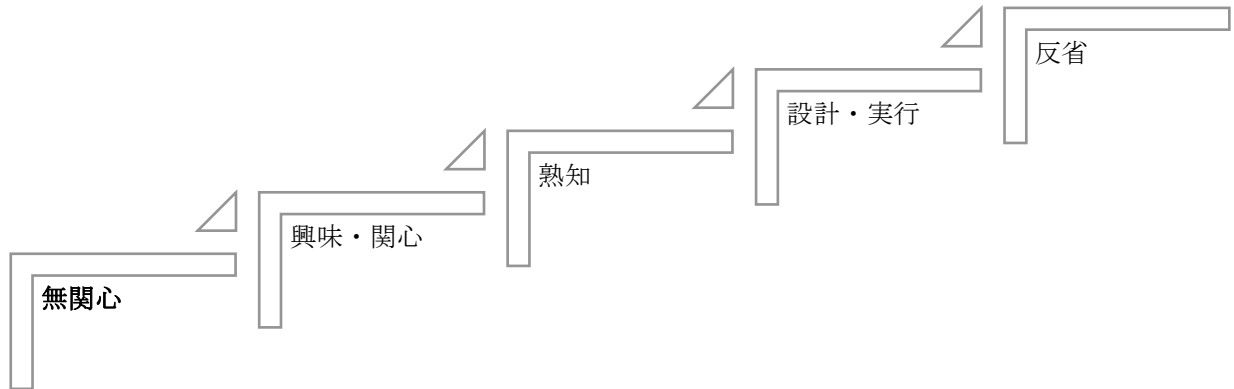
(インタビュー:フォトワーク事業部 竹内綾香)

国内活動



FEST の国内活動

◎アップリフトモデル

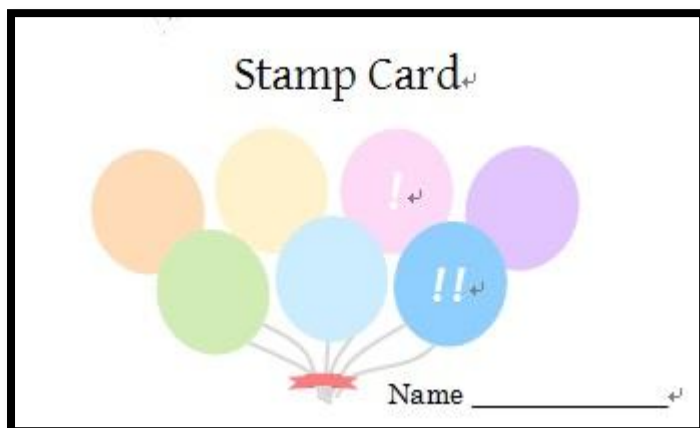


FEST の啓発、発信活動はこの「アップリフトモデル」を中心に展開しています。アップリフト(Uplift)とは、(知的・社会的・道徳的な) 向上を意味します。出張授業やイベントを通して参加者にどうなってほしいか、どのような人物に向け、どんなイベントを立案、実行するかを考える上で重要な指標になっています。

自分たちの経験や国際協力に携わる方々の話を参考にしながら作成したこのモデルは、「一度きりでは終わらない」継続的な啓発活動を可能にします。また、対象者をより明確にすることで参加者のニーズに合った出張授業、イベントを実施することができます。

このモデルの最高到達点としては、対象者が問題や現状について熟知した上でどのようにアプローチすることができるのか設計・実行、反省するというサイクルを継続していける状態を設定しています。常に考察と実行を繰り返し、より良い支援、より良いプロジェクトを探究していけることは国際協力に携わる人間、もちろん FEST 会内にも求められる重要な「能力」だと考えています。

◎スタンプカード

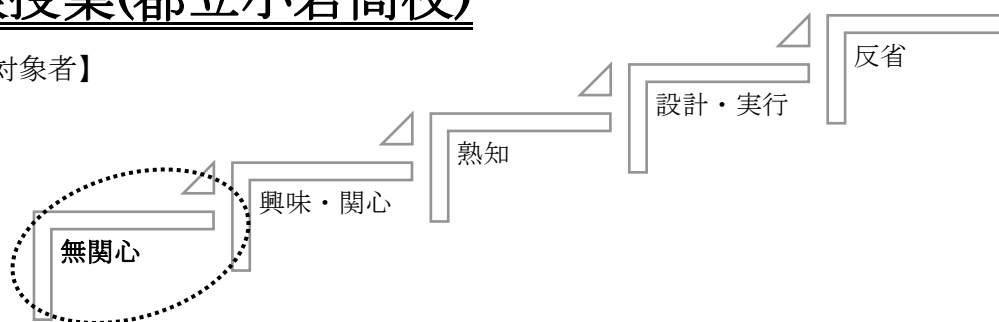


FEST のイベントに来るともらえる
FEST 特製スタンプカード！

集めていくと素敵なことが...!?

出張授業(都立小岩高校)

【実施対象者】

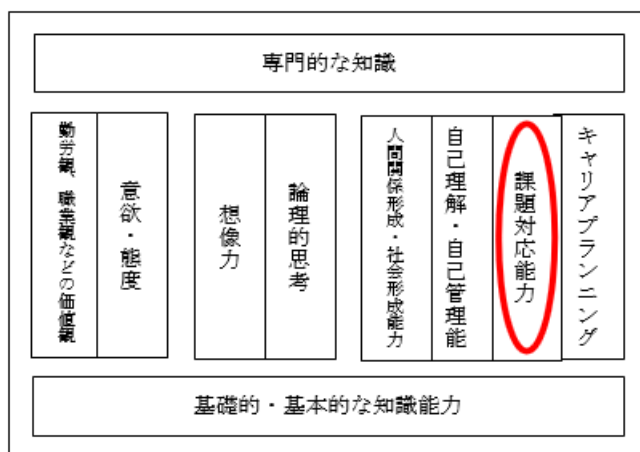


【立案背景】

「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」に入会したことをきっかけに、東京都立小岩高校への出張授業の実施が決定しました。FESTでは、地域教育推進ネットワーク東京都協議会の事業方針の一つでもある“都立高校生の社会的・職業的自立支援プログラム事業実施”に従って、身近な物事から国際協力をする上までのシステム思考を取り入れた授業を実施することに至りました。

【目的】

- ・課題対応能力の一環としてのシステム思考の体得



左は地域支援ネットワーク東京協議会の活動方針の一つ「都立高校生の社会的・職業的自立支援プログラム事業実施」を説明した図です。今回のプロジェクトでは、課題対応能力に着眼しました。

課題対応能力を取得するために、問題の全体像の理解と原因と結果の相互依存関係の理解を促し、さまざまな物事における因果関係（システム）について考えてもらうことが今回のプロジェクトの目的です。

【実施内容】

日時：2013年12月20日（金）10:40～11:30、11:40～12:30

場所：東京都立小岩高校

対象：1学年 320人（8クラス）

FESTメンバー：8人

内容：実際にFESTが行っているプロジェクトを参考にしながらグループワーク

【結果と反省】

授業への「満足度」の測定

- ・アンケート目標指数（5段階評価）

生徒：全体平均 4 先生：全体平均 3.5

- ・アンケート結果（5段階評価）

生徒：全体平均 4.37 先生：全体平均 3.41

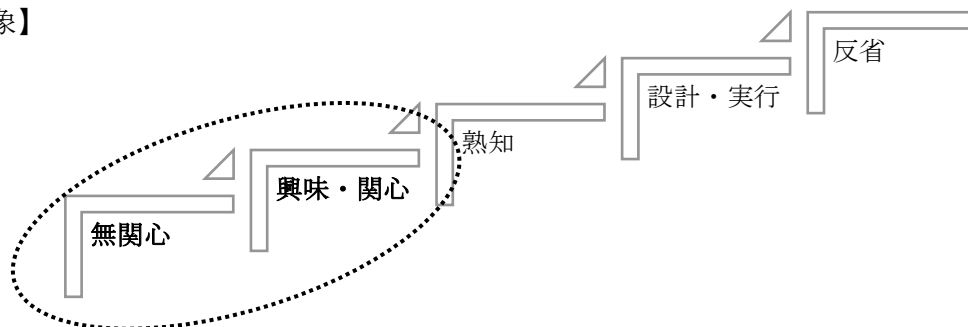
上記のアンケート結果からも分かるように、生徒からの評価は目標指数を超えたものの、教員の方々からの評価は目標指数を越えませんでした。原因の一つとしては、現地でのエピソードを取り上げて欲しいという意見が比較的多かったことが考えられます。今後は、当団体の活動内容といった団体紹介を授業内容に組み入れていきたいと思います。大学生という高校生と比較的近い立場からの授業では、多くの生徒とコミュニケーションを取ることができ、生徒だけでなく **FEST** メンバーも楽しんで授業を実施できたように思います。

¹「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」は、学校と、企業・大学・NPO等のネットワークをつくり、子供たちに豊かな、多様な体験学習活動が提供できるようにサポートし、活性化していく仕組みづくりを目指して、東京都教育委員会が平成17年に設立しました。

また、**FEST**としては、地域教育推進ネットワーク東京都協議会に入会することにより、今後出張授業の依頼を自動的に受け取ることが可能になりました。

出張授業プロジェクト(神奈川県立立川崎高校)

【実施対象】



【立案経緯】

2014年春渡航で回収したフェアトレードに関するリソースを用いて国際問題を取り上げた授業を考え、高校生を啓発対象とし発信します。発信する私たち自身がその知識を持っている必要があるため当プロジェクト実施によりメンバー自身がその問題の知識を深めることができ、新たに得た知識や経験を生かした今後のプロジェクトへの発展を期待できると考えています。そうしてプロジェクトを立案したところに丁度タイミングが重なり、神奈川県立川崎高校より UYIC(全国国際協力学生団体連盟)を通して授業の依頼を受け、この度出張授業プロジェクトが実現しました。

【目的】

- ① 「より質の高い国内への啓発・発信活動、学習機会の提供」—国内事業部の役割を果たす
- ② 対象者が国際問題や国際協力について知識を得たり考えたりする機会を設け対象者の興味関心を引き出し、次の関心(実際に行動する等)へ導くきっかけの場を提供する
- ③ 会内メンバーへの知識や経験を得る機会を提供する

【実施内容】

今回の舞台は FEST の支援地であるフィリピンです。実際に春渡航で訪問した SPFTC やバナナ農園を参考に、フェアトレードのコンテンツを考えました。フィリピン産のバナナは世界中に輸出されていますが、その貿易を行う際に起こる問題、その問題に対しフェアトレードが行われ改善された現地の状況、またフェアトレードが行われても未だ解決されない問題や課題点などを伝え、対象者が国際問題について考える機会を提供します。

※当出張授業は報告会当日(2014年10月26日)の時点では未実施です。

2014年10月30日(金)に行われます。

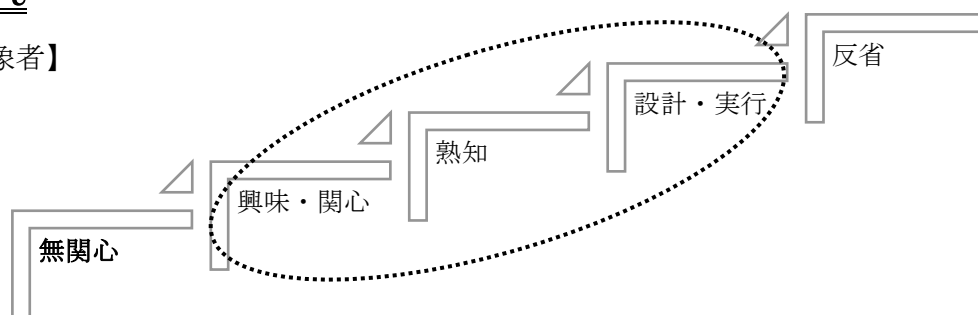
【今後の展望】

今後も中学生や高校生を対象とした出張授業の開催を続けていきたいと考えています。なぜなら、年代がそれほど離れていない大学生から国際問題や国際協力について直接話を聞くこと自体が貴重な経験ですし、それによって彼らが受ける印象や衝撃は普段の授業やテレビで啓発されるものよりも大きなものであると考えるからです。

国際問題について詳しく知らない人、興味はあるけど何をすれば良いのかわからない人、中には全く興味関心がない人も少なくないと思います。そのような学生たちがこの授業を通じて国際協力に少しでも興味を持つきっかけ、実行するきっかけとなれるよう、今後も積極的に高校生へのアプローチを続けていきたいと思っています。

Divert

【実施対象者】



【立案経緯】

国内事業部員が FEST で活動を行っていく中でメンバーに必要とされる能力を挙げたところ、論理的思考をはじめとする目的に記載した能力などが挙がりました。それらを身に着ける手段として最適であると考えたのがディベートであったため、ディベートのイベントを実施するに至りました。

【目的】

- ・ 論理的思考、多角的視点、情報整理力、聞く力、的確な意思決定力の取得
- ・ 議題に対する自らの考えの整理と他者の意見を吸収すること

【実施内容】

日時：9月27日(土) 15:00～19:00

場所：賢者屋

参加者：8名(他団体2名)

内容：“学生は国際協力活動をすべきか否か”という議題に対し肯定側と否定側にそれぞれ3人ずつになって分かれ、ディベートを行いました。ディベート後は懇親会を開きました。その際にはお互いの団体の渡航での出来事や悩み、それぞれが団体に入った理由などを話し合いました。

【反省とフィードバック】

参加者への資料配布など連絡が遅れてしまったことや、参加してくれた団体以外他団体に声を掛けていないことが反省として挙げられます。目的として挙げた能力を身に着ける手段としてのディベートの実施は良いという意見が参加者から挙がったので次回以降に今回の反省を活かします。

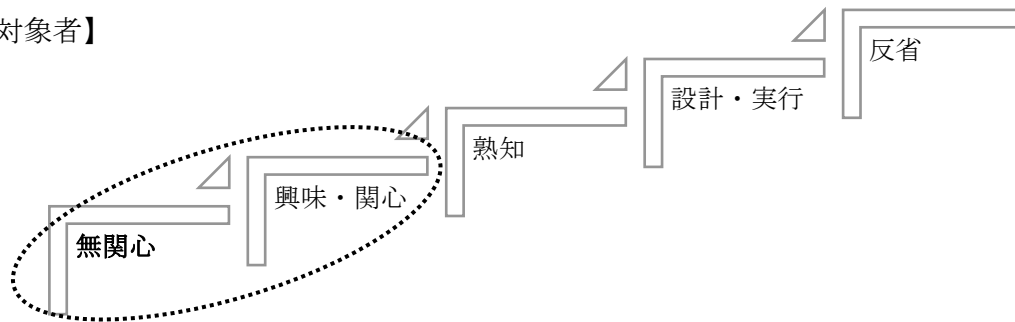
【今後の展望】

論理的思考をはじめとする目的に挙げた能力は活動を行っていく際に必ずと言ってよいほど必要とされます。今回はイベントという形の開催でありましたが、今後ミーティング中に会内ワークとして実施することも視野に入れています。

また、今回のような議題で行うと様々な人の自分たちの行っている活動に関連した意見を聞くことができます。自分の考えを整理でき、新たな考えを得られ、きっと活動にも生きていくはずです。より多くの団体の方々と行い、考えを深めていきたいです。

グローバルフェスタ

【実施対象者】



【立案経緯】

UYIC 全国国際協力学生団体連盟様からグローバルフェスタへの出展依頼をいただき、共催という形で出展することとなりました。

【目的】

グローバスフェスタ JAPAN2014 は『幅広い層の方々を対象として国際協力をより身近なものに感じてもらうと共に、ODA を含む国際協力の現状や必要性、政府と NGO 協力などについての理解と認識を深めてもらいながら、国際協力の参加を促進すること』を目的として開催されました。それを踏まえた上で、FEST としては『対象者に国際協力を行う上での「人と人との繋がり」について新しい視点から身近なものに考えてもらうきっかけの場を提供する』ことを目的として実施しました。

【実施内容】

日時：10月4日(土) 10:00～17:00、5日(日)10:00～12:00

場所：東京都千代田区日比谷公園（学生ブース）

テーマ：繋がり～私とあなたで作る世界の輪～

内容：ムービー上映、ギャザリングアート展示；フィリピンの人々と FEST メンバーへ

「あなたは将来世界がどのようになっていてほしいですか」という質問に対する答えを写真、ビデオ撮影し制作しました。FEST の団体説明と渡航報告会の広報も同時に行いました。

【反省とフィードバック】

- ・ これまでは渡航中に回収したリソースの活用が十分にできていないということがありましたが、今回はムービー、ギャザリングアートとしてしっかりと形に残すことができました。
 - ・ FEST メンバーの参加を呼びかけることにより参加メンバーも出展している他団体の方との交流や外部の国際協力活動を知る機会となり、会内メンバーに直接知識や情報をインプットする場を提供できました。また、他団体と、共同イベント開催など今後の活動に繋がる交流の機会を得ることができました。
 - ・ 国際協力に興味があり団体を探している人などに渡航報告会や団体の広報をすることができました。
- しかし、2日目にはメンバー内の情報共有不足からムービー上映ができずに団体紹介が中心となったこと、

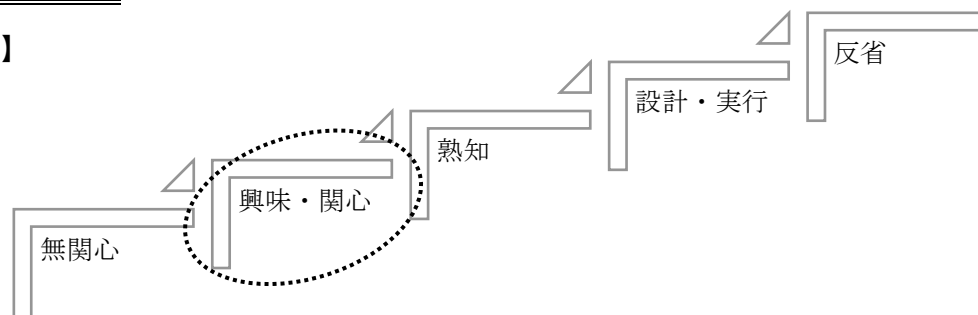
配布するチラシの準備不足が反省として挙げられました。

【今後の展望】

当日に展示したアートは渡航報告会でも展示予定です。また、ムービーも国内事業部の広報に使用するなど一度で終わらせることなく今後も活用していきたいと考えています。

FEST-youth

【実施対象者】



【立案背景】

去年 6 月に開催した写真展、The Next Vision がきっかけで高校生が **FEST** に所属し、高校生の立場から国際協力に関する独自の活動を最大限に実施するということで、**FEST** と共同で運営される高校生以下の会員から構成されるプロジェクトです。

【目的】

- ・国際協力に関して学習を行い、見識を深める

【実施内容】

活動場所：オリンピックセンター

活動日：隔週木曜日

メンバー：2 人

SNS：HP <http://festyouth2013.jimdo.com/>

Twitter @FESTyouth

内容：国際協力機関への訪問、テーマスタディ、JICA へのエッセイコンテスト応募

【反省とフィードバック】

高校生以下の会員募集期間が長くなったことにより、プロジェクトの開始が大幅に遅れてしまったことや **FEST-youth** の HP や **Twitter** といった SNS での広報を活用しきれなかったことが反省として挙げられます。

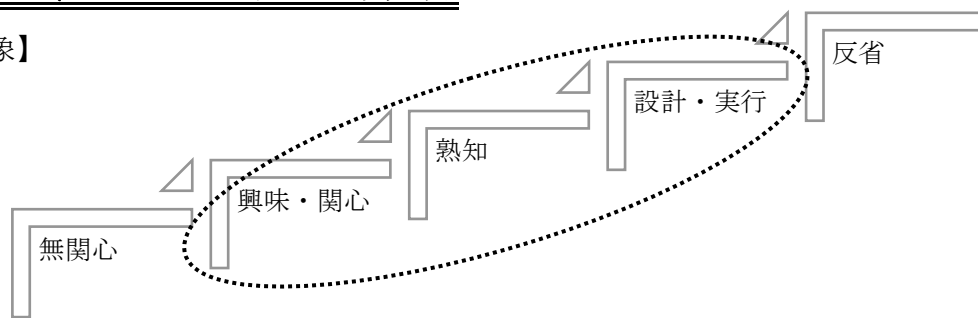
【今後の展開】

今後も引き続き国際協力に関して学習を行い、見識を深めることを主眼として、途上国についての講演者を呼んでの学習、テーマスタディ、議論、途上国へのスタディツアーに参加等を行います。また、学習した内容をまとめ、外部に発信し、全国的なコンクールに応募するなど、より活発な活動としていきたいと思います。

スタディツアーについては、自由参加且つ JICA や **FEST**、他の NGO による安全性の保障が明確に為されるものを複数選定した後、提示し、必ず保護者の同意書を提出した上での参加となります。

渡航フィードバック合宿

【実施対象】



【立案経緯】

FEST では現在、渡航者面談を行うことで渡航に行く目的などを言葉にして伝える機会を用意しています。しかし、肝心の帰国後のフィードバックは文章ファイルの提出のみ。渡航の前に考えていたこと、渡航後に考えたことを他のメンバーと共有することで今後の活動の発展に繋がると考え、当プロジェクトを立案しました。

また、渡航不参加者が渡航をしたメンバーが得てきたことが今後の活動に必要だと気付くのは、渡航が終わって時間が経ってからだと考えています。渡航経験者から得てきたものを直接詳しく聞けなかったことを、後から後悔してしまう人が出ることを防ぐためにも本プロジェクトを行いました。

【目的】

- ・自分が考えたことをメンバーに聞いてもらい自身の整理の場を作るため
- ・メンバーからも自分の考えに意見をもらうため
- ・渡航に行ったからこそ得られたものを文字だけでなく本人から直接聞くことで今後の活動、プロジェクトに活かすため
- ・渡航不参加者にもメンバーの考えを共有し今後の活動や次の渡航に活かすため

【実施内容】

渡航前に現地で確認したいこと・検証したいこと、渡航後に事前に抽出した確認したいこと・検証したいことの調査結果と、実際に現地に行ってみて確認・検証する必要があると感じたこととその調査結果をそれぞれ文書で提出してもらい、それを元に国内事業部でグループ分けをして座談会のような形式で行った。渡航前の確認・検証項目ごとに編成した班（以下①）を 1 日目に、渡航中渡航後の変化ごとに編成した班（以下②）を 2 日目に行いました。

また、各個人でのフィードバックと同時に、渡航でのプロジェクトごとの反省や共有、フィードバックも夜間に行いました。

・当日の流れ

1日目

①の班ごとに集合→班ごとに座談会→オリンピックセンターに再集合
→プロジェクトごとに渡航の反省

2日目

②の班ごとに座談会→班ごとに解散

【反省とフィードバック】

渡航直後であったため、日程の関係上メンバーの参加率が低くなってしまったことや、フィードバックの提出の遅れがあり、班編成が直前になってしまったこと、また明確に目的を伝えられていなかったことなどが反省として挙げられました。しかし、目的として挙げていたものにかんしては十分に達成できたと考えています。

【今後の展望】

今回の渡航フィードバック合宿の反省点を活かし、次回以降もよりよい渡航の整理をするような場が作られることを期待する。必ずしも合宿である必要はないが、各メンバーがプロジェクト以外の部分でも、渡航の経験を活かすことができるような環境を整備していくために、同様の取り組みが継続的に行われていく必要があると考えている。

杉山綾(すぎやまあや)

経理部長・国内事業部



FEST の最初と今の印象の違いは？

私が最初に見学に行ったのは、1年生の4月の初めだったな。まず初めに、「この人たち何？」って思った。(笑)ちょうど会内ワークでその時、監査だったさやかさんが貿易ゲームをやっていて。楽しかったし、でもちゃんと現状のことも学べて、すごい団体という印象でした。その日に即入会して、最初の方は活動に行くのが毎回すごく緊張していたな。怖いんだけど、入ってみると楽しくて、早くこの人たちの一員になりたいなって思っていました。今年一年半くらい活動してきて、運営にも入らせてもらって、色々なメンバーとも話せるようになりました。ミーティングの時はみんなもっと良くしようとする真剣で、他の人に対してもちゃんと厳しいこと言うけど、普段は私が何を言っても聞いてくれるし...すごく居心地がいいなって思っています。今では FEST は私にとってそういう存在になりました。

FEST に入っていなかったらどんな大学生活送っていた？

想像できないです。(笑) そういえば、1年生の春に FEST 以外ではテニサーの新歓に行ってみたな。練習とか参加したのだけど、ふと「私あんまテニス好きじゃないわ。」って思って...！で、辞めた！(笑) そこでちゃんと気づけて、FEST に入って良かったです。

唐突ですが、あなたが死ぬまでにやりたいことは？

FEST の見学時にもらったアンケートにも同じ質問があって、その時書いたのは「世界一周」。
国によって文化とか生活様式からにおいとかご飯も全く違うでしょ？それがすごい面白くなって思うの。旅はその文化の違いを身をもって体験できるから。建造物や衣服などの目に見えるものから、その国の人と話してみることで見えてくるものまでも知れる旅がしたいです。今一番行きたいのは、ブータンです。ブータンは幸福度が高く有名で、何でそうなったのか実際に行ってみて、見て知りたいから。

今後の FEST について

私は今期経理部長として運営メンバーをやり、FEST 全体を見るように心がけていたしメンバー一人一人とも話すように心がけていて。あと、先輩とも一緒に国内事業部でプロジェクトをやったので、そういう部分で得たものはある1と思うので、今後はそれを FEST に還元して行きたいです。まずは、当たり前の事が当たり前になれるようにしていきたい。それで、その後ももっともっと面白い事をみんなと一緒に作っていきたいなって思います。

(インタビュー：杉山ゆう)

フォトワーク事業部の活動



フォトワーク事業部活動内容

フォトワーク事業部長 竹村帆丘

【はじめに】

フォトワーク事業部は支援地でインスタントカメラを配布し、現地の方自ら撮影した写真を通して「現地目線」の追求を行う1つの調査プロジェクトにルーツを持つ事業部です。活動内容は多種多様で、フィールドも支援地だけでなく、フィリピン・セブ島全体を活動範囲に置き、さらには国内での写真展の開催やドキュメンタリー作品の製作活動も実施してきました。また「撮影倫理」を常に考え、撮影という行為を一方的な行為にせず、被写体が拒否できる状態、つまりお互い対等な関係性を持ち、信頼関係を築いた上での撮影を心がけています。そして、今期は新たに「フォトジャーナリズム」の視点を取り入れた活動であるジャーナルプロジェクトも実施しました。



このようにフォトワーク事業部は海外事業部や国内事業部とは違ったアプローチで常に「多角的視点」を意識しながら日々活動を行っています。

以下ではフォトワーク事業部の事業部方針と支援地以外で実施したプロジェクトを中心に紹介していきます。

【事業部方針】

多角的視点から現地の本質を探究する

現地の状況、人々を一側面からでなく経済、社会、環境、文化的面などの様に多角的視点から探究していくことで、現地の本質を捉えたより質の高いプロジェクト、発信活動の実行に繋がります。

現地において多様なコミュニケーション方法を用いて対等な関係を構築する

フォトワーク事業部が実施するプロジェクトであるカメラ配布、ドキュメンタリー、現地での写真展やワールドカフェなどのワークショップなどのように多様なコミュニケーション方法を用いて現地目線の追求や撮影倫理などを含めた対等な関係を構築していきます。

歪曲のない発信活動を行う

フォトワーク事業部が写真や動画、文章などで発信活動をおこなう際、メンバーからの視点だけに偏った発信ではなく、現地の視点を追求した上で多面性を持った発信内容にする。また、見る側の倫理についても考え、「思考の契機」になる発信活動を行います。

【ジャーナルプロジェクト】

＜立案背景＞

フォトワーク事業部が今まで実施してきた発信活動として写真展が主な活動でしたが、写真と記事という形でより幅広く、多角的視点を持った発信コンテンツとして当プロジェクトを立案しました。

＜実施内容＞

メンバーそれぞれが取り組むテーマを決定し、国内で事前調査をした上で、渡航期間中に取材活動を実施した。取材範囲は支援地内だけでなく、現地 NGO や農村、街中で一般層へのインタビューもおこなっていました。以下はメンバーの取り組んだテーマです。

- ・フィリピン社会におけるサリサリストアの役割
- ・もし50ペソがあったらどうするか検証
- ・フィリピン人のライフスタイルから見る家庭内の男女の役割
- ・フィリピンで使用される言語からみる文化
- ・フェアトレードとバナナ農園

＜成果と反省＞

現在、記事作成途中の段階で、完成次第団体 Facebook や web サイトでのリリースを行います。

反省点として、今回はメンバー各々が別々のテーマ取り組んだためタスクや質に個人差が大きかったことが挙げられます。今後は数人のグループで一つのテーマに取り組むことも視野に入れていきたいです。



【ドキュメンタリープロジェクト】

＜立案背景＞

昨年、出展した国際平和映像祭に今年も出展するにあたって、現地大学生との共同作成という形をとることで、多角的視点とより本質に近づく作品が製作できると考え、現地参加型ドキュメンタリープロジェクトを立案しました。

＜実施内容＞

渡航前の段階で、以前から繋がりがあった UP(university of Philippines)の生徒を通して当プロジェクトに参加したい生徒の募集を行いました。そして、渡航期間中に参加した UP の生徒とのミーティングを3回実施、ドキュメンタリーのテーマを「フィリピンの LGBT 問題」に決定し、それに対する意見、知識、構成などを共有しました。その結果、フィリピン人の LGBT コミュニティを紹介してらい、その一人にインタビューをすることになったが、スケジュールが合わず渡航期間内では実施できませんでした。

＜成果と反省＞

結果として今渡航では作品の完成までに至りませんでした。反省点として、スケジュール面や現地大学生との事前の共有が甘かったのが挙げられます。しかし、今渡航で繋がった現地大学生とは次回渡航でも共同活動が可能であり、我々も引き続き当プロジェクトに着手していきたいと考えているので、今回の反省も含め次回渡航に繋げ、活かしていきたいと思います。



来期の展望

次期代表 保泉泰宏

FEST TOKYO は来期で五年目になります。来期がどのようなになるか、なんて五期を背負う私でもわかりません。なぜか。FEST は毎年進化し続けているからです。五期の目標はあります。四期で理念改訂を行ったので、新理念の浸透と新理念に基づいて実行することです。しかし、この目標はすぐに達成できます。FEST の踏ん張りどころはその次にあります。実行したあとの結果です。結果を出さなければ、現地に貢献するだの、還元するだの、生活水準を上げるのは不可能です。結果を出すには五期は何をするのか、どのような団体にするのか説明します。

今期は理念が改訂されました。理念改訂により FEST の新たな方針が決定されました。しかし、この方針が会内にあまり浸透されませんでした。原因はいくつかあります。メンバーの理解がなされるほど説明ができなかった。時間的に余裕がなかった。今期の大きな反省点です。

上記にも記した通り、会内の理念浸透が十分ではないので、来期は、まず新理念の理解を深めます。前理念では理想の世界を定めることが前提としてあったので、どのような支援が良いか定めていました。しかし、新理念は今の世界・現状を懐疑的に見ることです。懐疑的に見ることにより、常に満足しない国際協力を行うことを目標としています。そして五期はどのような国際協力が良いのか、どのような支援が良いのか探究し続けます。

今後も理念のもと、現地主体で支援をしていきます。パライ班では、教育班、移住地・生計班に分かれています。教育班の最終目標は「貧困の改善」です。貧困の改善とは様々ですが、生計を立てられる職に就き、収入を安定させるということです。良い職に就くには大学を出ることだと考えています。なので、現地の大学の生徒と支援地内の生徒により、基礎教育を中心とした授業をパライの児童に行っています。大学を出ることにより収入が安定する最良の方法だと思っていました。

しかし、それが最良の方法なのか、私たちは疑問を持ち始めました。なので、今後は大学を出て職を得るのとは別の方法を探していきます。移住地生計班は具体的なリロケーションの計画まで立てること、ビジネスが軌道にのり安定した売上が得られ、収入が安定することを目標にしています。リロケーションの問題は、現地 NGO 訪問し、協力先を探すことを予定しています。今後はビジネスがいかに軌道に乗るかを考え、現地 NGO の情報収集をしていきます。ピナハボン班は現在、水道・ファンド班の一つです。現在進んでいる水道工事が間もなく完成します。そして、新オフィサーのもとファンドプロジェクトを確立し、次のプロジェクトへ着手します。(PJ の来期の目標)このように、団体 PJ の目標ははっきりしていますが、私一人の力では、成し遂げることはできません。そこで私がメンバーに求めるのは、主体性です。私がメンバーに主体性を求めるのは、指示待ち人間になってほしくないからです。社会に出て、社長に言われたこと、上司に言われたことしかできない人間は、良い人材とは言えないでしょう。

これは、現地に入った時にも言えますし、日本での通常活動の時でも言えます。主体的行動をするには、まず「自分の現状把握」です。自分は今何ができるのか、自分はほかの人よりも何をできるかを常に考えることです。そして、「自らで決断すること」簡単に言えば、決断を放棄しないことです。自分の現状把握もできました。決断することもできました。最後は「行動をする」です。メンバーには、失敗を恐れずに挑戦して欲しいと考えています。これが私の考える主体的行動です。

私自身について少し話させていただきます。私自身は **FEST** に入会して6か月が経とうとしています。この6か月この **FEST** から様々なことを学ばせていただきました。もちろんこれからも学び続けることでしょう。代表という立場になった今、統率力、原動力が求められます。主体性を持ったメンバーひとりひとりを代表の私が団体として一つにまとめなければ、団体として機能しませんし、結果を残すことはできません。先ほど、メンバーには失敗を恐れずに挑戦して欲しいと記しました。挑戦し続けることは難しいことです。しかし、私が代表としてアクションをおこし挑戦し続け、団体を引っ張っていきます。代表である私が団体の原動力になるということです。

これらが成し遂げられて、結果が出るでしょう。簡単な道のりではないです。しかし、これを乗り越えなければなりません。今後、**FEST** がどのようなになるのか、五期がどのようななるのか、私自身本当に楽しみですし、団体にメンバーに自分にプレッシャーをかけていき頑張っていきます。今後とも学生国際協力団体 **NGO FEST TOKYO** をよろしくお願いいたします。

あとがき

本報告書を最後までご覧いただきありがとうございます。
報告書の出来栄は、ご期待に添えるものでしたでしょうか？

この報告書から何かを感じた人、何かを得た人がもしいらっしゃるなら、
どうか「具体的な行動」に移してみてください。

生活習慣を変える、次の長期休暇にはどこか途上国に行ってみる、FEST の活動を見学する
どんなことでも良いと思います。

そうしたなかで、もし何かに対しての「具体的な答え」を持てたなら、
ぜひ私たちに教えてください。FEST はいつでも皆様からのお話をお待ちしております。

末筆になりましたが、私たち学生国際協力 NGO FEST に携わったメンバー、
活動中にお世話になった関係者の皆様にこの場を借りて心から感謝を申し上げます。

誠にありがとうございました。
今後とも、進化し続ける学生 NGO FEST をどうぞよろしくお願い致します。

また、次ページから付録として引退するメンバーのコラムを載せてあります。
敬語も含め形式はバラバラですが、このコラムはいわば映画のエンドロール。
ご紹介してきた活動を作り上げたメンバーの「本音」を是非ご覧ください。

付録・引退メンバーコラム



大森樹

中央大学法学部 3 年

海外事業部長



「かわいそうだから、大変そうだからなんとかしてあげなきゃ」こんな気持ちを最初に抱き、その為にはもっと現状をよりリアルな現場でしらなければと思い私は学生国際協力 NGO FEST に参加した。こう思ったきっかけになったのは大学 1 年の夏休みに参加したボランティアツアーである。

FEST に入って多くの人が言うのは「想像していた以上に現地の人は明るくて生き生きしていた」ということだ。私も最初同じように感じ、その土地の人が好きになり一緒に頑張って生活の向上を実現しようと意気込んだ。しかし現地の人と多く触れ合い共に行動する中で、そしてフィリピンという国で生活し人々の様子を見ていく中であることに気がついた。それは、我々が「貧しい」「かわいそう」と考えがちなこの国の中で人々は、良い表現が見つからないが、うまいことやっているのである。もちろんこれは私がフィリピンという国のセブ・マニラのような比較的人の集中する都市で、私が見てきた範疇での見解でしかないためそうではない国や地域が多くあるのも事実だろう。しかし、私は自分の見てきた世界については確信を持って言える。彼らは「かわいそう」「守ってあげなきゃ」「なんとかしてあげなきゃ」なんていう対象ではなく、彼ら自身がその環境の中で強く、そして賢く生きているのである。

セブ島のパライという支援地には 2 つの学部を卒業し、仕事をした後再び今度は法学部に通っている女性がいたり、母子家庭で子供二人を養うためにサリサリストアをやったり、その仕入れのついでにマーケットでの買い物代行をしている女性だったり、学校を出ているわけでもないのにお手製の半田ごてを使い回路をいじって音楽を再生させる機械をつくっているようなおじさんだったりがいる。これでも驚きだが更に私が驚いたのが、毎日家の玄関先で、もしくは屋台のような形で食べ物を売ったり、アイスを発泡スチロールに入れて売り歩いている人がいる。彼らは何の気なしに商品を買っているのではなく、日曜日で人がたくさんいるし暑いから普段は売ることがないハロハロを作って売るなど、環境と周りのニーズそしてどれだけ利益が見込めるかで商品を選択し、販売しているのだ。彼らは誰よりもそのエリアの状況を理解し、そして人々の動きや欲しているものを理解し行動を選択している。私はこのパライという支援地・そしてピナハボンという支援地それぞれで多くの人と出会ったが、学問としての知識がある人・生きていくための知恵がある人・両方を兼ね備えた人を見てきた。そしてそんな彼らを私は一人の人間として尊敬できたし、この人の話をもっと聞いてみたいと素直に思った。

実は私は今マニラでインターンシップをしておりそこで生活をしているのだがその中でも、セブと同様に人々に対して感心してしまう瞬間が数々ある。今回は二つほど紹介したい。まず一つ目がある雨の日の出来事である。私が電車の駅から歩道に下りてくると雨の影響で洪水が起きていた。道路はトライ

シクルで溢れ、歩道を歩く人は皆靴を脱いで歩いていた。そんな中、歩道でどうしても雨水が溢れてしまい水に足を浸からせなければ通れないような道があった。すると近くから木の棒を持った男が現れその木で架け橋を作って渡れるようにしてくれた。なんていい人なのだと思っているとその人はおもむろに手に平を差し出し通行料を要求してきたのである。私は困惑したが同時にこんな状況でもうまく稼ごうとするその姿勢というか熱心さに感心してしまった。そしてもう少し行くとさっき靴を脱いだ人を狙ってサンダルを売り始める人が現れた。路上で販売をする人々をあなたは思うか分からないが彼らは間違いなく優秀な商売人である。二つ目がパヤタスというゴミ山での出来事である。彼らはスカベンジャーと呼ばれゴミ山から使えるゴミを集めてそれを再利用することで賃金を得ている。私が驚いたのはそんな彼らの仕事がいかにしっかりとした分業体制で行われていたことだ。例えばマットレスの流れだと、まずゴミを集める人がいる、それを仕分けする人がいる、マットレスの中身のスポンジを取り出す人がいる、取り出したスポンジでもう一度マットレスの形に形成する人がいる、布で周りを覆う人がいる、最後に完成品を売りに行く人がいる。この分業体制は本当にすばらしかった。ゴミ山と呼ばれる中にこんなシステムチックな構造が存在しているなんて思いもよらなかった。

長くなったが、私が今回紹介した経験を踏まえてこの場で伝えたいのは一般に人々が「途上国で貧しいかわいそう」と捉えている人々は、我々が想像する何倍もたくましくそして賢く生きているということだ。今期の **FEST** で改訂をした理念のもとでは仮説を立てているのだが、それは「途上国の貧困層には問題解決能力がある」というものだ。問題解決能力があるかどうかはこれから **FEST** が明らかにしてくれると思うが、私は彼らが今の中で生きていくだけの力を持っているように感じる。そして最初は「なんとかしてあげたい」だった動機が、今はそんな彼らと何か面白いことを一緒にやりたいという風に変わった。これから将来歩いていく中でも多くのことを彼らから学んで成長する場面はたくさんあるだろう。そしてそれが私と出会った人にも起こすことが出来るくらい今後もっと自分で成長していきたい。そしてお互いが成長して何かを得られるような本当の協力関係を素敵な彼らと共に、自分がいる場所で作り出していこうと思う。

竹村帆丘

日本大学社会学部 3 年

フォトワーク事業部長

FEST 第 4 期渡航報告書をお読みになされている皆様、こんにちは。第 4 期フォトワーク事業部長を務めていました 3 年生の竹村帆丘です。私は大学 1 年生の春から FEST に所属していたので、かれこれ 2 年半ほど FEST で活動してきました。そしていま引退するにあたり FEST での 2 年半を振り返ると本当に色々なことがあり、日本、フィリピンともに濃密な時間を多くの人たちと過ごし、長いようでもあり早いようでもあり、とても感慨深い思いでいます。



そんな FEST の時間のなかで、メンバーとはくだらない話から真面目な話まで様々な話をしました。そんな時、自分の考えと反対の意見や批判が出ることも良くありました。人は出来れば自分に賛同してくれる意見を聞きたいのが普通だと思います。少なくとも自分はそうです。正直、いたたまれない気持ちになったこともありました。(笑) しかし、自分で自分の考えを批判的に検討するのはすごく難しいことです。そして自分への批判が多くを教えてくれるのも確かです。FEST はそれが出来る貴重な場でもあったなと思います。

話は変わりますが、私は今年の 11 月から半年間フィリピンに留学します。FEST に入る前まではこの選択肢は考えもしませんでした。向こうでは語学学校に通いながら、記事を書く活動や写真関係の活動を通して色々勉強、実践をする予定です。そして、特にこの「写真」に対して関心を持ったのはやはりフォトワーク事業部として活動する中での事でした。逆に言うと、それまでは「写真」に対しての関心はほとんどありませんでした。

そんな自分が「写真」というものに対して深く考え、向き合うようになったきっかけがありました。それは大学 1 年の春渡航、私にとって 2 回目の渡航の際でした。現地の住民からメンバーが行う写真撮影に対して不信感の声が出たことがありました。この時、もちろんショックもありましたが、納得する自分もいました。それまで私は写真を撮る行為が一方的な行為になる可能性があり、住民のその行為に対する不信感もどこかで感じていたからです。しかし、私はそれに対してしっかり向き合っていませんでした。

このことがきっかけで、FEST としてフォトワーク事業部として、そして自分自身が現地で写真を撮るという行為について顧みることができました。「写真」はあくまで手段の一つであり、目的ではないのだと。写真を撮るという行為の前に対等な関係性や信頼関係があり、その先に自分と相手のなかで「写真」という一つの形が出せるのではないかと考えました。しかし、正直なところ今の自分の考えが正しいのかは分からないですし、これといった答えも出せていなく、おそらく絶対的な

答え自体存在しないとも思っています。そして、常にその時の目の前の人にも、自分にも誠実であり、カメラを構える自分に自問自答を繰り返しながらシャッターを切っていき、あらゆる可能性の中で思考を継続させる姿勢自体が問われるのだろうと思います。この事は永遠に自分の課題としてあり続け、日々葛藤を繰り返していくと思います。でも、だからこそ自分のなかでの原点となった現地に対しては、**FEST** を引退した後も、何かしらの形で関わり思い続け、一生かけても自分の形で還元していきたいと思えるのです。また、これからの **FEST** に対しても色々なかたちで関わり続けたいと思います。そして、現役メンバーにはこの貴重な時間を大切にこれからも頑張っていて欲しいですし、自分も現役メンバーには色々な意味で負けないよう頑張りたいと思います。

最後になりますが **FEST** メンバーや関係者の皆様、現地の方々、本当にありがとうございました。

城岡里香

津田塾大学学芸学部 3 年

海外事業部



大学一年生の秋に FEST に入り、もう二年ほど経ちました。わたしはずっとパライ教育班として活動し、二年の間に 4 回渡航しました。はじめはどういう教育システムを作っていくかの模索の段階から、今では“Tutorial class”という形になりました。また、パライの人たちと FEST との関係性も毎回厚くなっていくのが感じられました。ぶつかったこと、励ましてもらったこと、感謝されたこと。パライの人たちへの想い、そして自分とパライの人たちについて、エピソードを交えながら話したいと思います。

【感謝】

初めての渡航の際、パライの人たちから「FESTは何をしているかわからない。不信感を持っている人もいる」という意見を聞きました。そのころ模索段階であつたので調査が多く目に見える成果が出せていなかったことや、英語や現地語の説明が不十分だったことなどが原因で、FEST とパライの関係はよくありませんでした。そこでわたしたちは、謝罪とプロジェクト、これからについて一軒一軒回って説明しました。その中のある家庭に伺ったとき、わたしたちは思いもよらぬことをその家庭のお父さんに言われました。



「日本人の学生がはるばるやってきて支援してくれることは本当に素晴らしいことだよ。ありがとう。国境を越えて支援してくれるのだから。わたしたち家族は君たちにできる限り協力するよ。」わたしたち FEST は現地のひとたちに不信感を与えてしまい、FEST の信頼がないことにかかなりのショックを受けていました。しかし、なかには説明すれば理解し協力してくれる人たちもいるとわかり、わたしたちは嬉しくて泣いてしまいました。この時にわたしは、ずっとパライに関わり、わたしなりに精一杯頑張ろうと決めたのだと思います。

【励まし】

今回の夏渡航でのことです。春渡航から夏渡航の間に Tutorial class が停止してしまいました。原因は Tutor 同士の仲たがいや、Tutorial class のシステム上の問題、パライの人が Tutor に対してあらぬ噂話をしているなど、様々な問題が複雑に絡み合っていたようでした。FEST も Tutor も重苦しい雰囲気でお話し合いをしていたところ、ある女性がわたしたちに声をかけてくれました。

「あなたたちがぶつかっている壁は人生の中でほんの小さいことなのよ。わたしなんて何度も洪水にあっているし、打ちこわし問題にも立ち向かっているわ。強く生きなさい。がんばって。」

もうこのプロジェクトがストップしてしまうかもしれない、と諦めかけていたわたしたちは現地の人たちのおかげで持ち直しました。やっぱりどこに行っても人生の先輩は素晴らしいです。わたしはこれからも落ち込んだときや困難に直面したとき、この言葉を思い出すと思います。

【FEST とパライの人たちとの関係性】



Tutorial class プロジェクトの **Tutor** たち（先生）は、現地大学生やパライ内の 20 代です。年代も近いこともあり、わたしたちは一緒に海に遊びに行ったりパーティーをしたりして交流を深め、とても仲良くしていました。仲のいいことは、支援する立場として良いことなのでしょうか。わたしは、必ずしも良いことではないと感じています。もちろん、仲が良くなり本音でいろんなこと

を話せるようになったことで見えてきたこともあります。人間関係の悩みだとかときには恋愛話まで、たくさん話すことでお互いに励まして頑張ってくることができたことが多々あります。しかし、仲良くなりすぎたせいで、注意してもごめん、で終わってしまうことがありました。甘えができてしまったのです。ミーティングが 11 時からなのに、一時間に時間平気で遅刻してくることもたくさんありました。あくまでも、**FEST** は **Tutorial class** がきちんと行われているか監視する立場です。どういう関係性が支援をするうえで適切なのか、これからの **FEST** の課題・論点として話し合っていってほしいと思います。

これでわたしは **FEST** を引退です。でもパライから引退するわけではありません。わたしとパライは一生関わっていきます。社会人になってもおばあちゃんになっても、ずっと気にかける存在になると思います。それが、パライと関わったうえでの責任でもあるとわたしは思っています。ただ、これからは **FEST** を引退した立場となります。どうこれからパライに接していくべきなのか、どういう関わり方があるのか、そしてまたどうしたらパライに何かできるのか模索していきたいと思います。

Salamat !! ありがとうございました！

大好きなパライの人たちへ

中野康平

國學院大學法学部 3 年

国内事業部・監査



大学 1 年の春に FEST に入ってから早 2 年半、もう 3 年で就活を意識し始めているということを考えれば、ものすごい早さで時間が過ぎていった期間だったと思います。引退にあたってすることが増え始めてからは、特にあっという間だったと改めて感じます。報告書に載るものなので駄文にならないよう精一杯書きます。

ただ何も考えずに書き始めると、收拾が付かず読めるものにならないと思うので、今回は「自分の中の FEST」にテーマを絞ってメンバーに向けて書こうかなと思います。恐らくメンバーが想像する「FEST の中の中野」とは誤差がかなりあると思うので。

入会から一貫して、私は国際協力やボランティアが嫌いです。単に偽善だと思っていたのが一番大きな理由でした。誰がどんな想いでどんなことをしているのかなんてさっぱり興味がなく、特に国際協力と総じていわれるジャンルは、先進国の余裕あるやつの道楽臭が鼻についてどうも嫌いでした。ただ大学生になって理由はないけど嫌いというのはどうにも子供っぽすぎていけないと思い、意を決して（一人でいく勇気はなく友達を連れて行った(その人の正確なフルネームを今はもう思い出せないのはここだけの話)）見学に行った日は、まだ最近のように感じます。

ただ見学に行ってもものの数分で入会することを決めました。この集団の中で自分がどこまでできるのかを試してみたいと思ったのが、一番の動機になったような気がします。そんな大それた発想を持って入っても、いかんせんビビりな質で、自分の中である程度プロジェクトが整理できて、団体の考え方が把握できるまではまともに発言すらしませんでした。恐らく突然スイッチが入って騒ぎ始めたので引いた人も多かったかもなあと今では振り返っています。

小学校の習い事から大学受験まで、振り返ればほぼ全ての意思決定に親の意向が関与していて、大学に入ってその抑圧から解放されたことの反動と、この集団の中でもある程度やっていけると潜在的に感じた自信とが相まってああいう状況になったのだと思います。そこからは 1 年で事業局長という FEST の実質副代表に立候補し、裏で台湾に行って元総統に会ったりインターンしたり、自分で団体立ち上げたり…。やりたいことが怒涛のように溢れ出てきて、らしくもなく後先を一切考えず爆走していました。

ある程度すると反動というエネルギーは枯渇してしまい、他の人からエネルギーを分けてもらおうと精力的に聞き役に回りました。かなり見栄を張って、それが考え出した役割であるかのように見せかけ、張りぼてだと自分では分かっていたがだましだまし事業局長を続けていました。けれども、この期間聞き役に回ったことは団体の中では一定の評価を得たようで、今でも当時の自分の姿勢に敬意を抱いて

くれている先輩、後輩はかなりたくさんいると思います。自分は原動力を失っている状態で、いかに自分自身に納得感を与えるかという無意識の打算的発想の末行き着いた他のメンバーのはけ口になるという消極的な姿勢が、常に積極的であり続けている集団の中で評価を得てしまったことが、自分では意識をしないうちに、自分自身の首を絞め続けていたのかもしれないと、今では感じることもあります。ただ、その期間の中で一つ確信を持ったのが、全てのメンバーが「学生国際協力は、政府機関や NGO の行う活動と比較して、常にヒエラルキー下位に存在している」という前提のもとに活動をしているということでした。この既成事実化しつつある潜在意識を打破することが団体に還元することのできる数少ないことであろうと考え、ロジックがほぼ完成していない状態で代表に立候補することを決め、これを支柱に走り続けました。組織という集団に対して、意識的でなくとも就任当初の期待を数段上回る貢献をしたという自負が当時あり、それは形になって自分に返ってくるであろうと信じていました。今も貢献度という点でいえば揺るがない自身があります。

しかしながら結果代表選には敗れました。単純に準備不足であったと思います。潜在意識打破のためのインパクトをいかに演出するかに気を取られすぎて、持ち味である計算高さが一切出せませんでした。選挙を終えて役職も支柱も失い、正直モチベーションも完全に消失していました。代表に声をかけられて団体には留まったものの、今でもその決断は間違いだったかもしれないと思うことが頻繁にあります。万全のパフォーマンスの 5 割も発揮できていなかったらというのが 1 年を振り返っての思いです。後輩にある程度任せなければいけないという意識が常にブレーキを踏んでいた面もありましたが、団体の運営という点のクリティカルな部分に関与出来ない状況に陥ったことで腐っていたというのが大きいと思います。最後まで残っていながら、100%を発揮する工夫をしないでいたのが大きな後悔です。ただそうした状況下で、色々なことを落ち着けて考えることが出来るようにはなりました。今では自分が真に成りたいと思うことが少しずつ、でも確実に見えてきています。

自分にとって **FEST** とは、国際協力とはなんだったのか。今の時点では、スケープゴートだったと言うのが結論です。人との関係の中で、プロジェクトの中で、終始自分の脆弱さを露呈させられ続けていました。それを隠すために利用していたと思います。文頭では、国際協力は嫌いだと断言しましたが、実際のところ今の自分に、この書面に残る文の中で、国際協力は嫌いだと言い切れる強さはありません。それほどまでに弱く醜い自分でありながら、常に気丈で強いように見せられていたのは、メンバーの軸の強さがあったからでした。本当にありがとう。

普段は弱気キャラではないので、こういう湿っぽいのはこれっきりにします。今のこのしょもない結論をひっくり返せるように、大学生活で **FEST** をやっていてこういう風に役に立ちました、なんて偉そうに言えるように、ここからは止まらず進んでいこうと思います。こんな根暗っぽいやつが、「デストロイヤー中野」とか後輩に言われるくらい強気でいれるだけの面子が揃っています。後輩の皆はこんな貴重な環境を存分に活かして、後悔ないように日々活動してほしいと思います。

大関ひかり

国際基督教大学教養学部 3 年

海外事業部



FEST 渡航報告書をお読みの皆様、初めまして。

FEST 3 年大関ひかりです。よく食べ、よく寝て、うっかりしすぎて年下からも心配されるような、そんな 3 年生でありました。拙い文章ですが、読んでいただけると幸いです。FEST での活動を振り返って率直に感じることを書きたいと思います。

突然ですが、FEST とは私にとってなんだったのか、F E S T に当てはめて考えてみました。

【 FACE ERRORS, START TRAVELING ! 】

ちょっと無理矢理かもしれませんが（笑）“失敗に向き合って、進み始める！”という感じに解釈していただけると嬉しいです。

FEST は、私にとって、自分の間違っていたこと、直すべきこと、足りていなかったことに、気づくことができた場でした。例えば、周りのメンバーをきちんと見て自分がどう振る舞うべきか考えること、常に自分の意見を持ってそれを主張すること、そのためになぜそう思うのか論理的に組み立てること、などなど…当たり前のことながら、FEST での 1 年半がなければ、すべてあいまいにしたまま社会人になっていたと思います。これもすべて、一緒に活動してくれて、刺激をくれて、話を聞いてくれて、意見をくれて、もっと頑張れと言ってくれた、FEST メンバーのおかげです。本当にありがとうございます。Travel のように、試行錯誤のこれからになって行くと思いますが、自分と絶えず向き合い、考えて、頑張ります。

国際協力を始めたのは、もし私が途上国の貧困層の家庭に生まれていたら・・・と思ったのがきっかけです。あんな家に住んで、学校も行けないなんて…！しかし、物質的に、機会的に恵まれていないことが悲しいことなのではないでしょうか。それもそうであるとは思いますが、私は、現地での活動を通して、住民が、仕方ない、こういうものだ、と無意識に思ってしまうことが一番悲しいと思いました。

ピナハボンでは、最終的に住民自身が生活改善のサイクルを自分たちでまわしてコミュニティをよくしていくことを目標としています。これを実現するには、これができるかどうかの前に、それを実現させたいという住民自身のモチベーションが重要だと、個人的に思います。

最初の渡航で、住民であるひとりのおばあさんから面と向かって“ホワイトカラーはお金を稼げるけど、ブルーカラーの労働者はどんなに働いても稼げないの。”と言われました。どうしようもないんだよ、という意味に感じられました。最後の渡航では、“日本についてどう思う？”と住民に聞くと、日本はお金持ちで、フィリピンは貧しくて、こんな私たちを助けてくれてありがとう、と返ってきました。根底に、自分たちは恵まれていないから、どうしようもないから、という思いを持ってしまっているように感じました。

環境が違うだけで、自分の可能性に気づけるかも変わってしまう。本当は可能性があるのに、それに気づかずに通り過ぎてしまう、これが一番悲しいことだと思います。人は、もっと自由に、自信を持って、生きていることを感じながら生きるべきです。これからピナハボンでプロジェクトが進んで、住民自身が失敗も成功も経験しながら、自分に自信を持って、それを人生のあらゆる面で発揮してほしいというのが私の一番の願いです。

それでも、もし私がピナハボンに生まれて、自信に満ちて生きていけるかな、と考えたら、そんな悠長なことは言っていられないと思います。社会的な困難があるのも事実です。だから、住民が頑張りたいと思える環境をつくる必要があります。そんな環境を FEST がつくり、それが広がって、**より**多くの人が、自分の可能性に気づいて、自信を持って、豊かに生きていける環境が広がることを願っています。

このように考えるようになったのは、FEST で私自身が感じたことともリンクしています。今まで、知識でしか知らなかったことが、目の前で起こり、海の向こうでの人々の生活がリアルに感じられるようになりました。その人たちと、FEST メンバーと協力して、実際にプロジェクトをして、生活を少しずつ変えていく。団体の運営でも、ここはこうした方がいい、これはどうするか、と話し合って実行していく。自分たちで考えて、決めて、実現していく。それが、私はこの社会に生きている！という実感につながっていきました。

考えだしたら、なぜピナハボンの人々はもっと希望を持てる環境にいけないのか、なぜ格差は、貧困はあるのか、日本のように発展したらフィリピンの格差は本当に縮まるのか、などなど、果てしない疑問がつきることはありません。FEST は、常に、どんな世界を目指すべきか、そのために自分たちがとれる手段はなにか、を考える団体でした。最初は、そんなスケールの大きいこと！（驚）、といった感じで現実味が持てませんでしたが、フィリピンに住む人たちの生活を感じられるようになった今、リアルな問題となりました。それでも、ピナハボンの住民のような人々が全世界で幸せに生きることは、とてつもなく大きな問題です。そのような大きな問題を見る視野も忘れないで、私にそのリアルさをもたらしてくれる遠くフィリピンのみんなに感謝しながら、足下もしっかり見て自分ができることを見極めて、絶えず自分と向き合いながら、進んでいこうと思います。

最後になりましたが、私にたくさんのことを気づかせてくれたフィリピンの支援地の皆様、FEST メンバー、支えてくれた方々、本当にありがとうございました。今後も FEST をずーっと応援しています！

蛭谷昭宏

学習院大学法学部 3 年

フォトワーク事業部



渡航報告書の作成に当たり、この度引退コラムを載せて頂きます、蛭谷(エビヤ)です。

私は去年の 12 月から **FEST** に入り、まさしくこの大学生活の一部として充実した日々を過ごせました。**FEST** は、一人の学生に多面的にもものを見る機会を与えてくれました。また考える上でのプロセスを教えてくださいました。この度自分は引退しますが、**FEST** での思い出はすべてが私の財産です。それは写真の中だけでなく、自分の心の中にも一生あり続けることでしょう。今まで **FEST** を支えてくれた関係者の方々および **FEST** メンバーには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

世界は小さくなっています。かつて大西洋を横断するのにメイフラワー号は 3 か月かかりました。しかし、今は数時間あればどこにでも行けるし、インターネットならほぼ時間的コストはゼロです。つまり、このグローバリゼーションの世の中では、私たちは日本人という箱の中にずっと入って生活していくことは皆無なのです。街中を歩けば外国人が歩いているし、大学生活中は留学生と関わる機会が多いと思います。このような状況の中ではお互いの文化の相互理解が本当に重要になってくると思うのですが、今おかれている周りの世界よりももっと広い世界を見たいという好奇心が、私を国際協力という舞台に連れて行ってくれました。始まりはきっと単純なのでしょう。でも、この **FEST** での 1 年間は本当に複雑にも多くのことを考えて活動していたように思います。支援のプロでもない自分がどのようにスラムの人たちとコミュニケーションを取っていくのか。そもそも国際協力とは何かとか、自分では答えの出せないような命題ばかり考えていたように思います。そんなことを考えながら、多くのことを学びました。でも、そこで特に一番大切だと思ったことは「自分がどこにしようとも、あたりまえのことを馬鹿にせずちゃんとやれ。」ということでした。人と会ったら挨拶をちゃんとする。家族や友、人との繋がりを大切にすること。人の目を見て会話すること。食事を楽しむこと。小さいお金も無駄にしないこと。相手も自分もしっかり気遣うこと。自国の文化だけでなく相手の文化や宗教観も尊重すること。今を一生懸命生きること。感謝の気持ちを忘れないこと。まさに生きていく上で大事な原点を再認識させられました。

私は **FEST** を引退しいずれか社会に出ますが、大学生活は自分の人生においてどれほどの重要さを占めるのでしょうか。人生を 24 時間の時計で表してみると、私の場合は午前 6 時 30 分くらいです。皆さんはこの時間何をしているのでしょうか。私の場合は寝ています。つまり大学生時代は長い人生のスパンから考えてみても、寝ていられる時間と考えることができます。7 時くらいに起きて、9 時くらいに出勤できれば良いわけです。人生が本格化していくのはこれからだと思います。しかし、これから出勤をする前に少し早く起きてみたらどうでしょうか。30 分早く起きればゆっくりパンとコーヒーが飲み、ゆっくり今日の服装が整えられます。朝シャンだってできます。つまり大学生時代とは、人生において良いス

タートを切ることができるかどうかを決める、かけがえのない時間とも考えられるのです。私はまだ 4 分の 1 しか生きていないのでこれからどのように人生転がっていくか分からないし、今このようなことを述べていることが本当に正しいのかわかりません。だからこそ、人生これからいくらでも軌道修正できると楽観的に思っています。だれしもが落ち着くところはほとんど差がないとも思っています。では、私は早く起きてゆっくり出勤の準備ができたのでしょうか。それはこれから答え合わせをしていくことだと思っています。でも確実なことは、**FEST** はパンと服とシャンプーを私に授けてくれました。それを自分は最大限活用しようと思いました。とてもかけがえのない経験ができました。

私自身に与えてくれたものは多くとも、**FEST** という団体にはどれほど貢献できたかは分かりません。それはパライの人たちに対しても同じです。また、3 年近くいたメンバーと比べても、私自身は小さな存在であったのかもしれませんが。**FEST** での自分自身の役割が分からなくなったこともありました。でも、私は自分自身のペースで真面目に 1 年間やりきったって思っています。さらに、そんな私にさらにスパイスを加えてくれた人は、自分ではない人たちでした。**FEST** メンバーのみんなや、自分の拙い英語やビサヤ語を理解してくれたパライの人たちでした。このような素晴らしい人たちと出会えて、目の見える繋がりができて本当に良かったです。今思えば何一つ、自分一人ですでたことなんてないと思います。また、自分と周りの支えとのバランスがずれても、もしかしたらできる最大限の結果には結びつかないのかもしれませんが。このバランスを支えるものが一種の信頼や愛情なのかな、と思っています。

そんな私を支えてくれた人たちへ。

最後になりましたが、本当にありがとうございました。

天筒晶子

津田塾大学学芸学部 3 年生

海外事業部



1 年生の秋のグローバルフェスタで国際協力に興味を持ち、特に **FEST** に惹かれ、2 年生の春に入会することに決めてからはや半年が過ぎました。早いもので引退です。**FEST** で何をしたかと聞かれて思い浮かぶのは、入会前に思い浮かべていた「国際協力」ではなく何かもっと不思議なものです(笑)

2 年生の夏の初渡航では、パライのことを沢山知りたいなと意気込みフィリピンへ行きました。しかし、そこで現地住民から「あなたたちは何をしているのか分からない」と言われてしまい、「国際協力」がしなかった私は「国際協力なんてお節介なんじゃないか、私たちの自己満足にすぎない」と考え、ずっとモヤモヤして私の初渡航が終了しました。

そして長いモヤモヤ期を経て最後のけじめとして渡航に行きました。そこで触れたのはパライの人の温かさであったり、**FEST** メンバーの温かさであったり、当初の私に関心を持っていた「国際協力」とは別のものでした。しかし、前回のようなモヤモヤは全然なく、むしろ満足感を得て帰ってきました。

今世界はボーダレス化が進んでいて、グローバル、インターナショナル、トランスナショナルなど様々な言葉が飛び交っています。皆さんも大学の講義で何気なくそのような授業をとっているのではないのでしょうか。しかしそういう授業は私たちに何か答えの出し方を教えてくれず、真のボーダレス化ってなんだろうなとたまに考えます。

今、「**FREE HUGS**」という運動が世界で注目されています。「みんなハグしようぜ~!」という感じの運動で、日本でも盛んになりつつあります。そこで、桑原功一さんという日本人男性が韓国でこの **FREE HUG** を行った様子が **facebook** に挙がっていました。最初はみんな **HUG** をためらって不審な目で見ていたのですが、ちらほら **HUG** をしに来る人が現れ最終的には沢山の人が **HUG** を交わしていました。

もちろんすべての人が肯定的なわけではありませんでした。怒鳴っているおじさんもいました。でもやっぱり草の根運動は大事で、政治を行う人には得られない何かがある気がします。政治家は何をするにしてもやっぱり国益がからんでくるし、その人がどんなに理想を持っていても叶わない部分が大半だと思います。そんな中で、こうやって自由に好きなようにフィールドワーク?を行えるのは私たち、特に学生の特権だと思うのです。だから草の根運動でしかわからないこと、草の根運動でしか発信できないことをどんどんやっていきたいなあと考えています!

大野航太郎

武蔵大学社会学部 3 年

代表



私は代表として今期、一つ大きな勝負に出た。創設者でもない私が、団体の理念を変えたのだ。

2010 年の設立から 4 年、創設期を知るメンバーはいなくなり、必然的に「転換期」となる代だった。問題は「どう変えるか」である。理念を広報フレーズとしてでしか機能しないように設定してしまっただけは、後の団体運営がままならなくなり、活動の至る所に矛盾が生まれる。「やる気」がすべての原動力、いわば「資本」となる学生団体の活動では団体の思想や迷った時に基づけることができる指針は大切なのだ。それは旧理念のもと活動していた私が実体験をもって知っている。

結論からいえば、私は **FEST** を「探究する団体」と定義することにした。

学校を建てる、井戸を掘る、といったように支援内容を固定化してしまえば理念や活動の指針を作ることは難しくないだろう。しかし、**FEST** は現地にに応じて活動を変化させていく団体だ。何を行うか、は現地で、もしくは現地の人々が決めていく。逆説的だが **FEST** に必要な理念は、極力活動内容を制限されない理念である。「探究」はメインコンセプトにおくには、まさにうってつけだった。

「探究」という言葉は少し難しく聞こえるが、ある事象に対して筋道を辿って明らかにしていくこと、つまり現地に本当に必要とされているものは何か、現地の貧困の原因はどこにあるのか、彼らは本当に能力が無く、怠け者だから貧困に陥ったのか、そういった事柄について深く考え、一つ一つ明らかにしていく。それだけである。基本的人権だ、**MDGs** だというのではなく、ただそれを行う団体なのだというのだから実にシンプルだ。そして、私たち **FEST** が行っている活動は（私が知る限り）昔からそうことだ。**FEST** は本質的に何も変わってはいない。私は、いままで作られてきた広報チックな理念を整理し、活動に落とし込みやすいようにモデル化したことと、団体の理念について現地の人や外部の方々に説明しやすいようにまとめなおしただけである。

今後の展望にもあるように、現状、この理念がメンバー全員に理解してもらえている状態だとは思えない。もちろん反省すべき事柄なのだが、しかし、私は肯定的にとらえている。理念はメンバーの思想や活動を縛りつけてはいけない。また、必ず「解釈」が必要だ。設定されたロジックから自分なりの解釈を生みだし、活動につなげていく。これがメンバーと理念のあるべき関係だと思っている。また、マネージャーは理念と結びつかないから、活動を潰していくのではなく、メンバーのやりたいことと理念がどう結びつくかに腐心するべきだ。

また、私がメンバーに残せた数少ない有意義なものの一つは、「理念改訂の責任を負える」ということだ。もしこの先団体が衰退して消滅することがあっても、その責任は「転換」を行った私に強くあるだろう。それは理念改定から承知しているし覚悟の上だ。団体が潰れた時の損失、特に支援地に対してはその時に振るえる全力を持って対応する。根拠はないが必ず何とかしてみせる。

そして、その状況に自らを置いたからこそ、正当性を持って継いでいくメンバーに言えることがある。「責任は俺が取る。やりたいようにやれ」。もちろん、妥協はしてほしくない。メンバーには常に自分に求めることができる最高のレベルを追い続けてほしい。しかし、これは理念とあっているのか、という不安から行動を止めることはあってはならない。理念はそれ自体に意味はないのだ。活動してこそ何かを変えられる。それだけは忘れないでいてほしい。

FEST

